
けいおん！ 飼い猫とふたりの夏

小日向 湊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！ 飼い猫とふたりの夏

【Nコード】

N6559M

【作者名】

小日向 湊

【あらすじ】

10/18 飼い猫とふたりの夏、更新について — その2を活動報告にて掲載しました。今後の予定等を書き連ねています↓
<http://mypage.soysetu.com/mypageblog/view/userid/39361/blogkey/280944/> 「私、あずにゃんを飼う」部室で言い放った唯の一言は、転じていつの間にか梓が唯を飼うことになりて紬の別荘へ……高校生活最後の夏に、放課後ティータイムの面々は胸に宿る想いと共に各々の一週間を過ごす。数多の仔猫は、別荘での

ふたりの夏に何を視るのか。そして飼う猫になるのは、果たして誰なのだろうか――

はじめに

当作品はSNS『mixi』上を中心にして執筆しております、けいおん！梓×唯メインの小説です。また当作品は、わたくし小日向湊とマイミクであります鈴原さんとの『リレー小説』という形式をとっています。

リレー小説と言う形式上、ストーリーが流動的かつ、前後でシナリオの微妙な差異等が生じてしまう可能性があります。その点に関しては予めご了承いただきたく思います。私共としましても全てを引くるめた上で、読み手としても書き手としても楽しんで創作しておりますので、お読みになってくださる皆様にも楽しんでいただけますよう最大限努力する所存です。

更新頻度は週に一度を予定しております。終幕までどうぞお付き合いくださいませ。

プロローグ..「ねえあずにゃん、私に飼われてみない？」

「ねえあずにゃん、私に飼われてみない？」

何の前置きも無しに、平沢唯は口を開く。昨春の始めに勝手に名付けられて以降、それとなく馴染み深くなったあだ名を呼ばれた中野梓は、まずこの先輩が何を言っているのかさえ理解できないと言った様子で、間の抜けたような表情をしてみせる。

季節は夏、学生は長期休暇の真っ只中。時刻は昼時、午後三時を過ぎたあたり。それは軽音楽部の仲間と別れ、同じ方向の二人が帰路についてすぐの出来事だった。

「……………はい？」

「だから、私に飼われてみない？ 一週間だけ」

「何を言い出すんですか唯先輩」

唐突過ぎるお誘いに、梓はただひとつ、溜息をついた。

「ほら夏休みだしさ、こう言うのもなんか良くないかなって？」

「良いわけありませんよ」

まったく——と口の中つぶやいた梓だったが、不意にいたずらっぽい微笑を見せては、こんなことを言ってみる。

「それより、唯先輩が私に飼われてみませんか？ 一週間で飼い馴らせなかった時は、私が唯先輩のものになるという条件で」

彼女としては、半分以上、冗談のつもりだった。だが面食らった先輩は、そうとは受け取れなかったらしい。

「え……？　でも、それだとたぶん私が勝っちゃうよ？」

「そんなの、やってみなくちゃわからないじゃないですか」

「それはそうだけど」

いきなりの申し出の為か、唯は珍しくも口ごもってしまう。一瞬にして話の主導権を奪取され、自分が彼女にしようとしていたことを逆に提案されてしまったのだから、混乱するのも無理はない。

その点、梓は冷静だった。

「私、唯先輩に『飼われたい』って思わせてみせますから」

梓のその顔の裏に仄暗い笑みがあつたことなど、唯が知るよしもない。唯は頷き、梓は約束ですよ、と小指を切った。

たったこれだけのやり取りで、それは冗談では済まなくなったのだった。

こうして、唯と梓の『主従関係』が、幕を開けた――

Turn. 1..「唯先輩、今のはNGワードです」

【湊's part】

照り付ける真夏の太陽も、窓とそれにかかるブラインドひとつを隔てた室内では有って無いのと同義になる。渚を伝う風もまた同様だ。

締め切った室内、外部から夏の要素を取り込む事を拒んだ室内、弱冷房の薄暗い室内にて梓は唯と対面し、さてどうしたものかと思案していた。

——目の前には、唯先輩。そしてその間には、恐らくは紬先輩が用意したものだろう黒いバッグが置いてある。中身は……唯先輩に使ってもいい、数々の道具、と思われる。日用品だ、なんてことは、万が一にもあり得ない。

琴吹家所有の別荘に、二人はいた。梓が唯を『飼い馴らす』ために、紬に無理を言って借りたものだった。冷蔵庫には一週間分の食料が、部屋には暇を持て余さないための娯楽がある。それでいて、無償で借りている。

まあ恐らく、だけど。紬先輩の事だから、部屋のどこかしらにはカメラを設置しているかもしれない。と想像していたら、調度品の影に隠れる形でカメラがひとつ、設置されてあるのを梓は早速見つけてしまった。

タダ借りしている梓がそれをどうこう言える立場には無いが、しかしもしも仮に企みが上手くいったら、紬先輩に撮影データをコピーしてもらおうのもいいかもしれない、と彼女は思った。

ところで唯は、どこか落ち着かない様子で梓を見ている。
梓はそれに気がついて、

「どうしました、先輩？」

「ん、あ、ううん、別に……」

声をかけてみるも、その返事はなかなか歯切れが悪い。彼女の心情を如実に物語っているように梓には思えた。

これは早急に事を始めないと唯先輩に悪いかな。梓はそう考え、とりあえずまずはパンドラの箱の中身を調べようと、バッグを引き寄せて口を開けた。

【鈴原・s part】

少女たちが強く意識しているのは互いの存在のみで、他のあらゆる事象は眼中にないといっても過言ではなかった。徒歩数分の距離にある海も、窓の外で降り注いでいる陽射しも、華美ではないものの高級感が漂う内装も、現時点では注意を向ける対象どころか空気のようなものでしかない。

清潔感漂う空間は今、緊張感に包まれている。一方の少女、中野梓は無言でバッグを覗き込んでいて、対面に座る平沢唯はどこか落ち着かない様子でそれを眺めていた。

口を開こうとしては閉じる、そんな仕草を繰り返しているところを見ると、後輩が何をしようとしているのか気になって仕方がないのだろう。

しかし、肝心の質問を口にすることができずにいる。それは不安のためか。あるいは未知なる体験への期待がそうさせるのか。と、ツインテールの少女が思い出したように顔を上げた。

「中身が気になりますか？」

淡々と言う後輩に、唯は素直にうなずき返す。当然だった。どうやって『飼い馴らす』つもりなのかはわからないが、そこには想像もつかない様々なグッズが収められているに違いない。

「では、見てみますか？ 何が入っているのか」

この時梓に、はたして本当にバッグの中身を確認させるつもりがあったのかどうか。これが駆け引きとして切られた一枚のカードなのか、それとも単に一風変わった催しとして楽しむ気で、深く考えずに放った言葉だったのか。それを知るのは発言者たるツインテールの少女のみである。少なくとも表情を見る限り、意図を読むことはできそうにない。

しかし、実際には、当の本人にさえ本当のところはわからなかったのかもしれない。

「取り敢えず、お茶にしましょうか」

どう答えるべきかと迷っていた唯の、わずかに硬かった表情が幾らか緩んだのを梓は見逃さなかった。もっとも、いちいち指摘することはない。飼い馴らすというのは、言葉責めを続けるという意味ではないのだ。

そして、同時に少女は思う。たとえ隠そうと試みたところで、元々ポーカーフフェイスが苦手な人間が顔色ひとつ変えることなく過ごすなど、土台無理な話である。この点は、彼女にとって有利に働く

だろう。

「温かいものもいいですか？ それとも」

「うーん。結構クーラーが効いてるみたいだし、温かいのをお願いしようかな」

「わかりました」

普段、音楽室でお茶を入れる機会がもつとも多いのは梓だった。先輩たちに用意させるのをよしとしない、固い人間だからではない。なんとなく、そうしているだけだ。強いて言えば、色々と面倒をみてもらっている礼であるとか、日本国独特の年功序列的な考えも作用しているのだろう。

別荘には、考え得るありとあらゆる道具が揃っているため湯を沸かすのは容易かった。てきぱきとティーカップや茶葉の準備を済ませると、途端に手持ち無沙汰となる。

「唯先輩は」

気が抜けたせいかな。ツインテールの少女は、どうして私を飼い馴らそうとしたんですか、と思わず口にした言葉をあわてて飲み込む。このようなやり取りは、必要ない。今回の目的はプライベートビーチを楽しむことでも、避暑でもない。唯をその気にさせることだけに、集中しなければならない。

「色々と持ってきたんだよ。ほら、私はお料理とかぜんぜんダメだし、あずにゃんのお世話になりっ放しになると悪いから、って憂が」

唯が憂、という単語を口にした途端、梓はぴくりと眉を持ち上げた。どんなに強固な堤防も、たったひとつの亀裂で崩壊する。どれだけの軍勢を用意しようとも、いきなり本丸に攻め込むことはでき

ない。まずは外堀を埋める。これは、そのための口実となる。

「唯先輩、今のはNGワードです」

「え、えぬじー？」

「はい。私たちは、私たち以外の人のことを口にしてはいけません」
「えー!？」

戸惑いの声を上げる先輩に、ツインテールの少女は薄い笑みを張りつけた表情で答えた。

「次から、NGワードを口にする度、唯先輩に罰ゲームを受けてもらいます」

ひとりの人間を心から従わせるのは、容易なことではない。それが一週間という短い期間ならば、なおのことである。梓は無意識のうちに、既成事実の積み重ねという手段を選んでいた。

「いいですか、唯先輩」

「え、でも」

「無理にとは言いませんよ。私が思いつきで決めた、一方的なルールですから。何か、いい案があればどんどん言ってください」

たとえばこの提案が受け入れられなかったとしても、攻め手が失うものはない。別の方策を練るだけの話である。ただし、梓に勝算がないわけではなかった。

「でも、その方がゲームらしくてよくないですか？」

まず、もっともらしい理屈を用意することで唯が首を縦に振りやすくする。そして、明るく冗談めいた言い方で、ほんの少しだけ唇

を尖らせながら、もう一押しするのだ。

「いいじゃないですか。元々条件は私の方が不利なんですから、これくらい受けてください」

「うん。わかった」

ほっとした様子でほほえむ後輩の姿に、唯も釣られて目を弓にする。

「ありがとうございます、唯先輩」

傍目には和やかなムードが広がる中、ティーカップの方へと向き直った梓の瞳に浮かんできた色は、二人にとって想像もつかないものだった。

Turn. 2 前..「憂……か」

【湊's part】

それは言うなれば、活力を一切合切捨て去ったかのような無機質な目。梓が決して人前では見せない、嫉妬心を孕んだ醜い表情に外ならなかった。

「憂……か」

心中ごちる。口には出していないため、これはセーフである。

あの様子だと、唯先輩は今回の旅行を憂に対して『ふたりきりのリゾートバカンス』だと話していたことだろう。……いや、この際人数は関係ないか。間違っても「あずにゃんに調教されてくる」なんて説明はしていないはずだ。

ただでさえお姉ちゃん子の憂が、姉が一週間も自分の傍を離れることに対して許可を出したことに、梓自身多少ならず驚いていると言うのに。……調教などと口走ろうものなら、その首が縦に動くことなど永劫ありはしない。

それだけ、梓は憂に信頼されている、そういうことなのだろう。だから何を用意し、唯に持たせたかはわからないが、微力なりとも役に立とうとしてくれた。

「……ごめん」

今度は口から言葉が漏れた。その憂の優しさと気遣いを、梓は裏切ろうとしている。……そんなこと、彼女は思いもよらないだろう。

もし梓が憂の立場であっても、親友が実姉を『飼い馴らそう』なんて考えているなど夢にも思わないし、喜んでもらう為に持たせた荷物が疎まれるとも、絶対に思わない。

しかし、なぜ謝るの？——と、梓は考える。もともと、こうなるであろうことを見越して唯先輩を『飼い馴らそう』としたのではないのか。親友を裏切ることには、いまだ何の躊躇いがあるのか。考えるだけ無駄で、野暮な話だった。——答えなど、この別荘に来た……いや、来ることを決めた時点で既に出ていたこと。そこに妙ちくりんな情が入り込む余地など、あつていいはずがないのだ。

——良い香りがする。茶葉の蒸らしが程よく完了しているらしい。梓はひとつかぶりを振って、ティーポットから紅茶を二人分、カップに注ぎ入れる。アッサムの深い赤色が、薄暗いせいかモノクローム調に映る部屋の中にあつて見た目にも鮮やかに感じた。これでタルトやらスコーンやら、お茶請けの焼き菓子があればなお良いのだが、そんな贅沢は言っていられない。

仕上げる……梓は、ポケットから小瓶を取り出す。先程、紬先輩が用意したであろういくつもの道具を確認した時に、あの中にありてなお異彩を放つそれをこっそりと持ち出してきていたのだ。使うのは今でなくとも良いのだろうが、折角の機会だ。効力を試しておきたいと思う気持ちはある。言っても一週間、計画は、まだスターラインから飛び出したばかりの位置にあるに過ぎないのだから。小瓶の口を開け、片方のティーカップにそれを数滴垂らし入れる。無色透明なその液が、アッサムティーの深い赤に溶けて見えなくなるまでなど、ほんの数瞬の話でしかなかった。

「——お待たせしました、唯先輩」

小瓶を再びポケットに戻した梓は、ティーカップを携えて唯の元

に戻り、片方の紅茶を彼女へと渡す。

唯は唯で、手持ち無沙汰な為だろうか。梓のことをずっと見ていたようだ。

「さつき、ちょっとそわそわしてたみたいだったけど、あずにゃん」

「そうでしたか？」

「……うん、そんな感じがした」

薄暗いとは言え、まだ昼間だ。余程の鳥目か近視でもない限りは、遮るものないリビングダイニングにおいて、互いがどう行動しているかなど筒抜けの状態である。そして背中は、思いの外お喋りだ。

唯が言っているそわそわが、憂について思考を巡らせていた時のことか、それとも紅茶を入れる時のことか、どちらなのか梓にはわかりかねるが……少し、浅はかだったかもしれないのは確かだった。

「気のせいですよ。私がそわそわする理由がありませんもん」

梓は努めて冷静に、やんわりとそれを否定した。そして、

「折角温かい紅茶を入れたんですから、冷めないうちに飲みましよう」

淡く笑って、唯に紅茶を飲むように勧める。余計な詮索をされないうようにと促したのだが、どうやら奏功したようだ。

ふたりは揃って、紅茶のカップに口をつける。一口啜って、一息ついたところで、案の定とも言えるべきか。

変化が現れた。

Turn. 2 後..「大丈夫ですか、唯先輩！」

【鈴原's part】

「……っ」

梓はティーカップを口元から離れたところで、自身の手が震えていることに気づいた。反射的に漏らしかけた声をかろうじて抑え、あわてて正面に座る先輩を盗み見る。幸い、唯はこちらの様子に気づいていなかった。少しでもおいしく頂けるようにと、事前に熱湯を注いであるため、思いの他熱かったとみえて、いったんテーブルに置いて持ち手を変えている。そこで、ふと顔を持ち上げた唯は自分が見られていることを知って、少し照れくさそうにえへへと目を弓にした。

「じゃ、いただきますーす」

視線を察したのではなく、たまたまそうしただけなのだろう。安堵を覚えたツインテールの少女は心に余裕を取り戻し、ほほえみを維持したまま会釈を返した。次いで来るべき変化に備えるべく、ソーサーにカップを置く。とはいえ、完全に平静を保っていられる程、梓の心は鉄壁でない。否が上にも緊張感が高まる中、ついに静かな室内へ紅茶をすすする微かな音が響き、直後、それは唐突に爆ぜた。そう表現するにふさわしい現象、すなわち口から吹き出した琥珀色のシャワーがテーブルに降り注ぐ様は虹のきらめきを幻視させる。

「!?!」

ツインテールの少女はにわかに何が起きたのか理解し損ねて、幾度も瞬きをした。だが、先輩が苦しそうにぐっと眉を寄せたかと思うと次の瞬間には突っ伏してしまったのを見て、みるみるうちに青ざめていく。

（まさか、毒……？ でも、そんなはずは）

バッグに詰めてある荷物はこれでもかというくらい、何度も確認してある。服用するタイプのものは万が一にも手違いがないように、梓は自ら口にして効用を確かめたのだ。垂らしたのはほんの数滴で、分量を間違えようがない。知らない間に中身が入れ替わるなど、ますますもってあり得ない。

（ラベルだって、ちゃんと合っていたし……って、そんなの、後）

そう。ここで考えるべきはそのようなことではない。時間にすればわずか二、三秒の出来事だったが、保身を図ろうとしていた自分にツインテールの少女は歯噛みし、顔を歪めた。

「大丈夫ですか、唯先輩！」

テーブルを回り込んで先輩のかたわらへと駆けつけた梓は、心配そうに顔を覗き込もうとして、思いきりのけぞる。唯がいきなり体を起こしたのだ。

「あっつーい」

「……は？」

ツインテールの少女の目が点になる。発言を額面どおり受け取る

ならば、熱かったので冷まそうとしている、ということか。夏場、暑さに参った犬がするように、平沢唯は口外に舌を突き出していた。

「あの、唯先輩」

「ごめん！」

戸惑う梓に向かって、唯は眼前で何かを練成できそうな勢いで両手のひらを合わせて平謝りを開始する。

「本当にごめんね、あずにゃん。せつかく入れてもらったのに吐き出しちゃうなんて」

「いえ、それは構いませんが」

唯は受け取った返事に歯切れの悪さを感じたとみえて、ぱつと笑顔を取り戻すと緩く握った拳を肩の辺りでわずかに上下させた。

「あ、やけどなら大丈夫。我慢していたら危なかっただろうけど…
…あ！ 一応耐えようとはしたんだよ？ したんだけど、つい」
「……もう、いいですよ。それより、まずはこれを拭かないと」

安心して、と言動によって伝えようとする先輩に、呆氣に取られていたツインテールの少女は小さくかぶりを振る。

（まあ、簡単に行くとは思ってなかったけれど）

梓は表情に落胆の色が表れないよう意識しながら、取り敢えず倒れたままのカップをソーサーに置く。このやり取りはすべて撮影されている。紬が後で腹を抱えて笑うであろうことは想像に難くなかった。

その時である。

「こういう時、う……」

「う？」

「う、烏骨鶏！」
うこつけい

きょとんとするツインテールの少女の耳に届いたのは、何の脈絡もない単語だった。

何故このタイミングなのか。目に映る範囲に卵はなく、窓の外を鶏が歩いているわけでもない。

(……あ)

梓は胸中で暗い情念が急速に沸き起るのを知覚して、声を失う。それは別に、ウガンダでも瓜でもウスターソースでもよかったのだ。どれだけわざとらしかったとしても、“う”から始まるある固有名詞を口にしかけたことをごまかすことさえできればそれでいい。あくまでも、NGワードを言葉にすることのみが罰ゲームのトリガーなのだから。

「あずにゃん、どうかした？」

「いえ、何でもありません」

ツインテールの少女は、中腰の体勢を解く動きと重ねることできり気ない風を装いつつ先輩と視線が交わるのを避ける。追いかけてきた唯の目線が梓の顔を捕らえた時には、すでにほほえみという名の仮面がすべてを覆い隠していた。

「今のは危なかったですね。もう少しで罰ゲームでしたよ」

「へへへ。そう簡単に引っかかる私じゃないよ。えっへん」

腰に手を当てて胸を張る先輩の姿を尻目に、ツインテールの少女はティーカップに手を伸ばして告げる。

「私、台拭きを取ってきますね」

「あ、いいよ。私が汚しちゃったんだからあずにゃんは休んでて」
「いいんです。私にさせてください」

梓は明るく、否応を言う暇を与えることなく言ってソーサーを手に取り速やかに背を向けた。今、唯にそのような雑務をさせるわけにはいかない。何故なら、嫉妬で歪んだ顔を見られてしまうからだ。

（少なくとも、最初の一回は道具なんか頼らない。絶対に。絶対に……）

この時はまだ、彼女は己の気持ちを正しく理解できていなかった。正確に知ることが梓にとって幸せかどうかは、また別の話なのだが。

Turn. 3 前：「いらっしやい、待ってたわ」

【湊's part】

梓が唯の紅茶を携えて台拭きを取りにキッチンの方へと戻る。その後ろ姿を見ていた唯は、小さく震えるその背中を目の当たりにし、ばつの悪そうな表情をしてみせた。無論、梓にはその顔が見えてしまふことはない。だからこそその表情でもあったわけだが。

少し、悪いことをしたかな。唯は思う。

悪気があったわけではないし、梓を落胆させるつもりなど勿論だが毛頭無かった。可愛い後輩が、私のことを従順にしてみせると言ったとはいえ、それに対する反抗と梓を悲しませることは、話が別なのだから。

されど……本当に悪気は無かったのか、改めてそう訊ねられると、唯はきつと、曖昧な答えしか返せないだろう。

遮るものがない、リビングダイニング。加えて唯が座っている場所から、梓が紅茶を淹れていた場所まで、大した距離があるわけではなかった。

だからもし——梓がポケットから“何か”を取り出して、そのまま紅茶に向かい“何か”をすれば——その一部始終を、唯が見逃すはずが無かったのだ。暇を何か娯楽に費やしていたわけでも無いのだから、視線が梓の方へと向いてしまうのは、言うまでもなく必然であった。

そしてその“何か”をした紅茶を渡してきたならば、それを怪しまぬ者など、どこに 있을까。その紅茶は飲むべきものではないと、唯は直感的に悟っていた。

しかしながら最低限、飲む振り程度は梓に見せなければ逆に怪しまれてしまう。少なくとも、温かい紅茶を要求したのは他ならぬ唯なのだから、渡されたものをあからさまに拒むわけにはいかない。単刀直入に指摘するなどのもつての外だ。

だから唯は、わざと吹き出した。全くもってエレガントとは言えない方法だが、残念ながらいまの唯にはこれ意外に思い付くことが無かったのだ。

酷い猫舌と言うわけでも無いので、理由として熱さを挙げたのはどうかと一瞬思いはしたものの、梓はうまいこと引っ掛かってくれた。ただそれが梓の胸中に渦巻く背徳感情があつてのことだと言うのを、いまの唯は知るよしもない。

おかげで紅茶は飲めなかったし（梓に何か仕掛けられたことを唯が悟った時点で、それを飲むには至らなかったわけだが）テーブルは汚れてしまったし、結果的に梓には嫌な思いをさせてしまった。……震えた背中とは、間違っても空調設備のせいではないであろうし、唯ですら耐えられる冷房で、梓が寒がる訳が無いのだから。だとすれば、考えられたのは自分のせいだと言う結論、ただひとつのみ。

我が身の保身に走った唯が謝っても、悔やんでも、どうにもならないことだが、致し方無いと割り切るしかないのが、唯は少しだけ悔しかった。

されど。

もう少し、いい方法があったようにも思えてしまう。

普段から考えごとが嫌いな部類の唯がこうも様々思考を巡らすのは、この別荘に蔓延する異様な雰囲気のためだろうか。それは残念ながら、唯にも、梓にも、モニターの向こうにいる紬たちにもわかりはしなかった。そして唯は、自分たちが監視されていることを、まだ知らない。



唯の元から半ば逃げるようにキッチンへと戻ってきた梓は、自身のカラダが微かに震えていることに気が付いた。唯先輩の冷房嫌いを考慮して比較的緩めの温度設定にしてあるにも関わらず、こうなってしまうているのは何ゆえか。

答えは、考えるまでもない。

事実、カラダは若干震えていながらも顔の、いや全身の火照り具合が尋常ではなかったのだから。

「はあっ……はあっ……」

吐息もまた、体温と比例したかのような熱を抱き、梓の口から放出されていく。……いまとなつては、なんて愚かなことをしてしまったのかという自責の念しか浮かんではこない。第一の仕掛けに失

敗したともなればなおさらである。

されど、梓は思う。

我慢出来ない程の辛さではないと。

幸い、先程とて気丈に振る舞った結果、唯に対して何かしらを悟られた様子は皆無だった。主導権はまだ、梓にあると見てよいだろう。

もともと、勝率の低い賭け事に興じているようなものなのだ。梓にとって大事なのは、もしかしたら開き直すことかもしれない。

呼吸と思考を整えて、梓は台拭きを手に取り踵を返す。
と、その途端。

別荘内に、音が鳴り響いた。



「こんにちはー」

暑い暑い、昼下がりが。ただただ広いお屋敷を眼前に、律と濤のふたりはその門が開くのを待っていた。

「いらっしやい、待ってたわ」

ややあって。

入り口が開かれると、向こう側から歩み寄る人影があることをふたりは見取ることができた。

紬である。

真っ白なワンピースと幅広の帽子を身に纏って現れた紬は、どこをどう見ても「お嬢様です」としか言い表せない容姿と雰囲気であった。半袖シャツにジーンズと、かなりラフな格好で赴いてしまった律からしてみれば、自分の服装は場違いなことこの上無い。見慣れないロングスカート姿の滯の方が、まだそれらしく感じてしまう程だ。

「ごめんね、急に呼び寄せちゃって」

「あ、いやあ、それは別に大丈夫って言うか……なあ、滯？」

「えっ……ああ、うん」

どこか歯切れの悪い返事をするふたりに対しても、紬はその微笑を崩すことは無かった。

立ち話もなんだから、と紬は早速、ふたりを屋敷内の一室へと通す。ちなみにその部屋に辿り着くまでも、またさらに五分から十分ほどの時間を要していた。滯の様子が妙に落ち着かないのは、見慣れない場所に緊張しているせいだろうな、と律は思った。かく言う律も、様々と気が気では無かったのだが。

ふたりが通された部屋は、随分と黒い管が入り組んでいた。そしてその管のひとつひとつが、機械を介していくつものモニターと連結している。

画面に映し出されているのは、とある部屋の様子。そしてその内

のひとつに、彼女たちが見慣れた、ふたつの人影が存在した。

言わずもがな、唯と梓である。

「……ほんとにやってんだ」

律が呆れ半分にそう呟いた。

梓が唯を『飼い慣らそう』としていることは、紬を介して既に律と滯にも通達されていた。当の本人たちはそれを知らないが、現状を鑑みた時にそのことを彼女たちが知っていようと知っていなかつた、大した差はなかった。

「いまさつき別荘に到着したみたいなの。とりあえず寝室に荷物を置いて、いまはふたりでリビングにいるみたいよ」

対して紬はご機嫌だ。珍しく鼻歌まで交えて、何ゆえそこまで機嫌を良く出来るのか。律にはその理由がわからないわけでは無かったが、素直にそれを受け入れたくは無かった。不純だし、なにより一歩間違えれば軽音部の絆に壊滅的な亀裂が生じてしまう。部長としては、複雑な気分ではある。

それについては滯も同意見であった様子で、

「なあ、ムギ。いまからでもやめさせた方がいいんじゃないか……？」

力なくではあったが、そう進言した。
しかし、

「どうして？」

紬の反応は、案の定だった。

「せっかく、梓ちゃんが素敵な提案をしてきてくれたのに、それをお断りするのは酷い話だと思うわ。部外者の私がどうこう指図するのもね。それにふたりの恋路を見届けるのは、私たち軽音部員に与えられた義務だと思うの！」

妙に熱っぽく、紬は演説した。

漣は胸中、溜息をついた。

Turn. 3 後..「あずにゃん。ねえ、あずにゃん。大丈夫？」

【鈴原's part】

(でも、唯先輩がこれを飲まなくてよかったのかもしれない)

梓は無意識に触れていたポケットの膨らみから手を離して胸元に拳を押しつけると、呼吸を落ちつけるべく深く息を吸った。強い尿意に似た感覚が間断なく襲ってくるせいで、頬は火照り、体は熱い。変調を悟られまいと無理に抑えようとしているせいか動悸はひどく、気を抜けばすぐに呼吸は千々に乱れてしまう。これはもはや気のせいで済ますことのできるレベルの変化ではなかった。いくら唯が無条件に人を信じる傾向があるといっても、原因が何にあるかわからないはずがない。当然、飲み物を入れた人間が何か妙なものを入れた犯人と考えるだろう。

(とにかく、薬の効果はずっと続くわけじゃないんだから、この場さえ乗り切ってしまえば……)

ツインテールの少女は小さく震える自身の肩をぐっとつかむと、口元を笑みの形に固定して、台拭きを手に取りテーブルの方へ向き直ろうとした。その途端、不意に視界が揺らいで、平衡感覚を喪失する。頭の片隅で己が危地にあると、必死に警鐘を乱打する自分があるのだが、いかんせん思ったように体が動かなかった。もしかすると、罰が当たったのかもしれないと、そんな考えが頭を過ぎる。

『ねえあずにゃん、私に飼われてみない？ 一週間だけ』

そもそも、唯はどうしてそんな問いを投げかけてきたのだろうか。冗談のつもりだったのか。それとも、梓のことを音楽室で飼っている亀のトンと同じような、愛玩動物と捕らえているのか。ことあるごとに抱きしめるのは、そういう意味なのか。そして、もしもあの時彼女が首を縦に振っていたら、ふたりの関係はどうなっていたのだろう。これまでとはまったく違うものとなっていたのか、何も変わらなかったのか。

今日を迎えるまで何度も繰り返されてきた自問の答えは、当然ながらバランスを崩して倒れる最中に導き出すことができるはずもなく、顔から床に倒れたらイヤだな、と梓が遠ざかる意識の中で諦め半分の言葉を漏らしたその時、ガタン、と椅子が派手な音が聞こえてきた。次いで、柔らかな感触に抱きとめられて、浮遊感が霧散する。

「……？」

ツインテールの少女は我が身に何が起こったのかにわからず、ゆっくりと瞼を持ち上げた。痛みはなかった。その代わり、目と鼻の先に、氣遣わしげに覗き込んでくる先輩の姿があった。

「あずにゃん。ねえ、あずにゃん。大丈夫？」

ぎゅ、と腕に力を込める唯の胸中は手に取るようにわかった。彼女は内心を隠すことができるような、器用な人ではない。見た目どおり、心配しているのだ。自己の欲求を満たさんがために薬を持ったバカな後輩を、心の底から案じているのだ。

「……唯先輩」

かそけし吐息のような語が梓の口からこぼれ落ちた。包み込むような温もりは、彼女の中に安堵を生んだ。

「貧血？」

それとも風邪かな、と自問めいた言葉を発して唯の首がわずかに傾いた。ツインテールの少女は視線をやや伏せながら、本当のことを言うべきかどうかを迷い、曖昧なほほえみで自身の顔を彩る。

「……そうみたいです」

発熱、発汗、立ちくらみなどの症状だけをみれば、この返事はあながち嘘ではない。しかし、無条件の優しさで接してくる先輩に対して、誠実さをまったく欠いた回答といえる。何しろ後半のつぶやき、すなわち都合の悪い言葉は聞こえなかった振りをしているのだ。梓は心苦しさを覚えてほんの少し、身じろぎをした。

「あずにゃん？」

「何でもあります。平気です」

無垢そのもののまなざしを向けられることに耐えきれなくなつて、ツインテールの少女は瞳を閉じた。自嘲で口元が歪みそうになるのを、唇を真一文字に引き結ぶことでこらえる。自分でも笑ってしまったくなる程動揺しきっているというのに、どこが平気なのだろう。

それでも、深呼吸をするといくらか気持ちちは落ち着いていた。すると、それを待っていたかのように唯があずにゃん、と柔らかく呼びかけてくる。

「はい」

梓はゆっくりと瞼を開いて先輩を見やった。唯は穏やかな表情でこちらを見つめている。

「台拭き、貸して。私が拭くから」

ツインテールの少女は、言われて初めて自分が件の布切れを握りしめていたことに気づいた。意固地になって断ることもできたが、そんなことをしても恥の上塗りである。言われるままに台拭きを手渡すと、予想外のつぶやきが聞こえてきた。

「ごめんね、あずにゃん」

「え……？」

「ううん、なんでもない。じゃあ、あずにゃんは休んでて」

そっと体を起こされた梓が声を詰まらせている間に、唯はすっと立ち上がる。

「あ……」

直後、思わず出してしまった声に、ツインテールの少女は大きく目を見開いた。先輩と、彼女がもたらす熱から離れがたく感じている自分に、愕然とする。これでは、すでに飼い馴らされたも同然ではないか。

「どうかした？」

「いえ」

伸ばしかけていた腕をあわてて引っ込めつつ、梓は顔を背けた。

どうすればこの主従ゲームに勝利する術を見出せるのか、見当もつかなかった。



ツインテールの後輩が倒れたその時、紬の部屋に悲痛な叫びが響いた。

「梓！」

モニターにかじりつかんばかりの勢いで席を立った漣は、直後、唯に助けられて梓が事なきを得たことに安堵して、ぐっと眉根を寄せる。

「おい、ムギ」

「どうしたの、漣ちゃん。怖い顔をして」

「どうしたの、じゃない」

おっとり小首を傾げる紬に、黒髪の少女はいら立ちを隠そうともせず語を継いだ。

「今からでも遅くないって。止めさせよう」

「どうして？」

「どうして、って」

しかし、はっきりとした太い眉を持つ少女はまったく意に介する

様子もなく、むしろ諭すような口調で応える。

「滯ちゃんが心配するのも無理はないけど、いざという時のためにお薬はきちんと用意してあるし、医師を向かわせることも可能よ」
「でも」

「聞いて、滯ちゃん。これは、ふたりが望んでしていることなの。私たちは、むやみに介入するべきではないと思うの」
「そうかもしれないけど」

バックアップ体制が整っているから安心していい、と紬は言っている。なるほど、それならば万一何かがあったとしても大事には至らないのかもしれない。その理屈はわからなくもなかった。だが納得することができず滯はなおも言い募ろうとして、それを止めたのは律だった。

「滯、それくらいにしておけ」
「律まで」

思わずかっとなって腕を振り払いかけた黒髪の友に、カチューシヤの少女は顔を寄せつつ囁きかける。

（ここは引け。感情だけで言っても始まらないだろ）

目を白黒させる滯の肩をぽんぽんと二度叩くと、普段とは逆だな、と内心独りごちつつ律は頬をかく仕草をみせて紬を見た。

「まあ、止めさせるかどうかはともかくさ、いいのか？」
「いいのか、って？」

質問に質問で答えるバカ発見、と喉まで出かかった冗談を飲み込

んで、カチューシャの少女はわずかに顎を引く。

「安全のためとはいえ、これって、盗撮だろ？」

これはある種の賭けだった。ここまで大掛かりなセットを準備できたのは犯罪性を意識していないからこそ、だろう。そのことに気づかせられたならば、あるいは思いとどまらせられるかもしれない。

だがそうした思いはあっさりと打ち砕かれた。

「ええ。でも、保安のためだもの。仕方がないわ」

悪びれるどころかさも当然といった風に、紬はにっこりと笑顔で答えたのである。

完全に当てが外れた律は、茫然と立ち尽くす滯と顔を見合わせて苦笑するしかなかった。

Turn. 4 前：「どの仔猫も、素直じゃないんだから」

【湊's part】

『ねえあずにゃん、私に飼われてみない？』

脳内で木霊するのは、あの日の午後の、自らの言葉。唯が梓に向けて何気なく発した、事の発端。

もう一週間近くも前になるのか、と思えば、酷く懐かしくさえ感じてしまう。その『事』は、まだ始まりを告げて数時間ほどこか経過していないと言うのに、おかしい話だなと唯は思った。

卓上の零れた紅茶に布をあてがって、前後左右に右手を動かす。その単純作業のさなかともあれば、何かを考えつつ実行するに難くはない。と言うよりも、元来掃除洗濯などの清掃活動を嫌い、いまはそのほとんど全てを実妹に課しているような状況なのだ。ゆえに唯が無心でテーブル拭きに打ち込めるはずなどなく、その手捌きも頗る鈍い。現実逃避のため何か考え事をするに走るのは至極当然の流れと言えたが、一端が梓の行動にもあるのは言わずもがなだった。

梓のそれは、焦りとでも表現すれば良いのだろうか――唯は考える。

風邪か、貧血か。熱中症だと言うことは考えにくいし、大病を患っているなんてことは考えたくもない。ともあれ、病と称せるであろうものに侵されている現状にありて、ひとまず何か成果を上げたいて考えるのは極一般的と言えるかもしれない。

——ここまで移動してくる間には、そんな素振りなど微塵も感じさせなかったのに。

それは梓の強さか。はたまた、弱さか。

もし後者だとするならば。唯は、己が行動を悔やむのだろう。軽率だった、と嘆くのだろう。後悔は先に立たないのだと、梓の背を見ながら痛感したにも関わらず、だ。

もしあの時、梓の策と知りながらも真紅のアッサムに舌鼓を打っていたならば、彼女の望む展開となっていただろう。自分のカラダがどうなっていたかなど知るよしもないが、少なくとも梓が心に傷を負うことはなかっただろう。誰の傷つく姿も、唯は見たくないのだから。

ただしそれでは、いくつか辻褄が合わなくなるのもまた事実だった。辻褄が合わなくなると言うよりは、自分の発言との整合性が取れなくなると言った方が正確かもわからないが。

『ねえあずにゃん、私に飼われてみない？』

誰の傷つく姿も見たくはないと思いながら、さりとて唯は自分の発言で他の人間に衝撃を与えてしまっている。そしてそれは、彼女自身も理解している。

つまりは中野梓を好いている人間が唯以外にもいた、と言う現実。それを彼女とてきちんと承知していたからこそその宣戦布告だったのに……皮肉なことに、いまはそれが大きな足枷となって唯につきまといっているのだ。

ありし日の部室を、唯は回想する。

そこには軽音部の仲間たちが、梓を除いては全員揃っていて。
今日も今日とて深い味わいの紅茶とみずみずしい果実をふんだんに使用した洋菓子を堪能して。

そして――回想が、途切れた。

唐突だった。ゆえに思考回路の全機能が強制終了を告げ、同時に全身が硬直する。止まった右手は、未だ卓上舞踏会の終焉を迎えてなどいないと言うのに。

簡単な話が、混乱だ。

だたし唯が大きく取り乱すかのような仕草を見せないあたり、その混乱と言うのも他者の介入によって沈静化を図らねばならぬほどに深刻ではなく、時間の経過、脳内回路の復旧による状況把握によりおのずと解決に導かれるものではあった。フリーズ、と言ったほうがより正確かもしれないが、しかし唯が身動きが取れなくなった背景には、物理的な側面と言うのも存在していた。

膝立ちでテーブルを拭いていた唯のアンダーバスト付近に回された、華奢な腕。

背中全体にかかる熱。特に呼吸は、口腔経由で空気の出し入れが促進されていることもあって、幾度となく唯の背に、まとわりつくかのような熱気を帯びて吹きかかる。

未発達の両の膨らみもまた、申し訳程度ではあるが存在を主張してやまない。

密着したカラダとカラダ。誰と誰のが……など、思考をめぐらせるだけ時間が無に帰することとなる。当たり前だ、現在この別荘には、ただのふたりしか存在し得ないのだから。

「あず……にゃん？」

中野梓が先輩を抱きしめるチカラは思いのほか強く、ずっとこのまま抱きすくめられていては要らぬ吐き気を催しかねなかった。行為自体については、唯としては勿論嫌な気はしないものの、またの機会にゆつくりと――と、思っていた。

されど梓に、抱擁を解こうとする素振りはなかなか見られない。そのうち三分が過ぎ、五分が過ぎ――

「あ、ずにゃん……どうしちゃったの？　苦しいよ……」

苦痛に歪みつつあった唯の顔。しかしながら彼女が梓の、小さな小さな呟きを聞き逃すことはなかった。



琴吹邸の一室、漣と律と紬が一同に会すその部屋は、唯と梓が宿泊する別荘とはまた違った類の、異様と表せる空気に包まれていた。漣と律の、不機嫌とまではいかないものの複雑そうな表情は先程までと相違ないし、紬の上機嫌もまた先程までとは相違ない。しかし、そこに違和感はなかった。まるでこれが普遍的な三人の日常だとも言うが如く、三人は淡々と、モニターに向かう。

それが異常なのだと、疑う人間は誰一人としていなかった。紬は言わずもがなであるが、「盗撮じゃないか」と紬に言い寄ったものの軽くかわされてしまった律も、そして漣もまた、どこか食い入るように、いまは画面の中に住まうふたりの動向を注視している。

結局のところ、それは三人が三人ともに今後の展開に少なからず興味を抱き、唯の発言に対し全く同じ台詞を言い放った梓を注目していたと言うことの証明であった。好奇心には勝てないのだと、目の前に出された禁断の果実を味見せずにはいられないのだと言うことの体現でしかなかった。

それでも、梓が不意に唯を抱きすくめたシーンでは、思わず目を背けてしまった人物がひとりだけいた。

漣だった。

「みおちゃん？」

紬が訊ねる。漣のその心中を察しては気遣いの言葉としてかけたのかもしれないが、されどその顔は声音ほど優しげではないように律の目には映った。

「……ごめんムギ、お手洗い借りていいか？」

漣が紬のそれをどう受け取ったのかは律にはわからない。しかしこの部屋から、この場から、いまは離脱したいと考えるあたり、あまり良くは思っていないのだろうことは明白だ。

「ええ、それは構わないわ。ふたりもこれから一週間はこの家で過ごすのだから、ある程度の部屋の場所は覚えてもらわなくちゃね」

「——え？」

驚愕を孕んだ漣と律の声が、重なる。

「ちょっと待って、泊まるなんて」

「言ってなかった、かしら？」

反論しかけた漣も、しかし紬の有無は一切受け付けないとでも言いたげな仄暗さを含んだ微笑の前に、完全に言葉を失ってしまった。

「きちんと伝わってなかったのなら謝るわ。でも気にしなくてもいいのよ、食事と着替えは勿論、お茶とお菓子も一流のものを用意しているの。ふたりがゆっくりくつろいでいってくれば、私も嬉しいわ」

紬の台詞を受け、漣と律はしばし口を閉ざした。紬のそれが、提案ではなく強要なのだと言うことを勿論理解していたがために、どうしたものかと思案する。しかしながら嫌なら無理だと断ればいい話であり、いくつでも出任せの嘘八百を並べて押し切れば良いだけのことだ。されどそれが瞬時にできないのは、つまるところ琴吹邸にある数多の誘惑が、それだけ魅力的だと言うことであった。

「ちなみに、お手洗いは部屋を出て右手側の突き当たりよ。……映像はリアルタイムだから、なるべく早く戻ってくることをおすすめするわ」

紬は、それすら計算したうえでこの誘いを持ち出してきたのか。ふたりには、その意図を垣間見ることはできないものの、さりとて現状では、選択肢などあって無いのと同義だ。

「あ、ああ……わかった」

漣は――頷いた。

そしてゆっくり立ち上がり、入り口の方へと向かっていく。

「……ごめん、あたしも」

続いて律も、滯の後を追う形で立ち上がっては、連れ立って部屋を出て行った。

「――ほんと」

なおも映し出される唯と梓の姿を眺めやりながら、一気に人口密度が下がった室内で紬は、ぽつりと呟く。

「どの仔猫も、素直じゃないんだから」

勿論だがその発言を、そしてその言葉の意味を、紬以外のメンバーが知ることはない。

Turn. 4 後:「どうして? 澤ちゃんは梓ちゃんのハダカを見たくはない

【鈴原's part】

「……ん」

目を覚ました梓は、最初、自分がどこにいるのかわからなかった。微かな声が漏れて、不鮮明だった意識が覚醒する。どうやら、いつの間にか眠っていたようだ。葉の効果はすでに切れたとみえて、体の火照りはすっかり引いていた。

（唯先輩は）

ベッドの上で、我知らずシーツを握りしめながら部屋を見回すが、誰もいない。じっとしていられず体を起こすと、黒髪が頬に触れて、ツインテールが解かれていることを知った。

「何をしてるんだろう、私」

脱力し、再び身を横たえた梓は自嘲的なつぶやきをもらして口元を歪めた。何も覚えていない。寝室まで運んでもらったことも、寝かしつけてくれたことも、おそらく、呼気の乱れが収まるまですつと側に居てくれたことも、記憶になかった。

天井には落ち着いた色合いの、唐草を思わせる円と曲線を使った文様が描かれている。一部分を切り取っても成立するその図は、全体を一枚の絵と見立てることができた。窓から漏れ入る陽射しが存

外柔らかく感じられるのは、レースのカーテンが特殊な作りになっているためか、あるいはガラスに紫外線をカットする膜が張られているからか。

しかし、心が落ち着くはずのそれらをもつてしても、彼女の胸中はざわついたままだった。今ここにはいない、綿菓子の人型に固めたような先輩の顔が頭に浮かんで離れない。目を閉じようと、開けていようと、唯のことを考えずにはいられなかった。

梓は無意識のうちに、頬に触れていたことを知覚するや体を反転させて枕に顔を埋めた。それは、先輩の背中に押しつけていた側だった。できることなら、今すぐ海に飛び込んでそのまま消えてなくなりたいと、本気で考えた。

あの時、唯を背後から抱きしめたあの時、何を思ったのか。

『ごめんなさい』

熱に浮かされたような状態で何度も口にしたのは、謝罪の言葉だった。記憶はおぼろげで、あるいは夢だったのかもしれない。だが、そうであればどれほどよかったかと考えた直後、シャツ一枚越しに伝わってきた温もりがにわかによりみがえって小さくうめく。頬が、さつと朱に染まる。

出来心と言ってしまうばそれまでだが、いくら用意されていたとはいえ、あれは用いるべきではなかった。仮に首尾よくことが運び、結果、唯を思うままに操れたとしても、後悔せずにはいられなかっただろう。それでは勝ったことにはならない。試合に勝って勝負に負けるという表現が、ぴたりと当てはまる。

（こんなことを考えている時点で、負けのような気もするけど）

飼い馴らす、つまりはいかにして相手の心をつかむか、それが今ふたりが別荘にいる理由のはずだ。そこに勝ち負けはない。賭けの対象が自身の心であるが、面従腹背することはできる。試合に負けたとしても、本当の意味では負けていないことになる。

梓がこだわったのは、罰ゲームの存在だった。いかにして、相手にその責めを負わせるか。それが、この様である。梓は数回、子どものように足をばたつかせてから、深く嘆息した。

「最低」

己の器が小さいことを、自覚せずにはいられない。何しろ、対抗意識から手段を選ばず攻めようとしたのだ。身を持って効果を知ることになって、かえってよかったとさえ思える。あれば、受けてしかるべき罰だったのだろう。安易な方向に流されたことへの、戒めだ。

（唯先輩はどうしてあんなことを言っただろう）

あの日から今に至るまで、梓はまだ未解決のまま放置している問題を直視してこなかった。それは主従ゲームを始めるにあたって、根源的な意味を持ち、これから過ごす一週間の意義を問うものであるが、意図して考えないようにしてきた。

果たして、本当のところはどうなのか。

（私は、唯先輩を飼い馴らしたい、って思っているのかな）

実際、どうしたいのだろう。いくら考えてみても、わからなかった。

た。第一、たった一週間のうちに意のままにできるほど想わせることなど、よほどのことがない限り、それこそ薬物でも使って強制的に自我を奪うなどの方法を使わなければまず無理な話である。

（自分に勝ち目のない賭けをして、それって、私は唯先輩に飼い馴らされたいと思ってるということ？ まさか。まさか、そんな。そんなはずは……）

梓が自身の思いつきに愕然としたその時、高く響いたノックの音で、終わりのない思考の渦から現実へと引き戻された。大いに安堵を覚えながら、起き上がって居住まいを正してどうぞと返事をする。

だが、先輩を迎えようと淡いほほえみに彩られた表情は扉が開いた瞬間に凍りついた。

「憂……!？」

黒髪の少女はかすれる声で、部屋に入ってきた少女の名を口にす。あまりのショックに、顔に十文字の亀裂が走り、口ではなく眼球から体液が吹き出すかのようにだった。

「どうしてここに」

梓の視界が揺れ、歪む。もしかすると、実際に体が揺れているのかもしれない。

「どうして」

目の前に立っているのは紛れもなく平沢憂だった。これは悪夢なのだろうか。あるいは、神が用意した罰なのか。

いずれにしても、この場にいる以上、先ほどの出来事をすべて知っているのだろう。梓にできるのは、何故かにこやかな彼女の口から悪罵が飛び出すのを待つばかりだった。

そのはずだった。

「どうして、って、あずにゃん、もしかして寝ぼけてる？」

不思議そうに小首を傾げる少女の声は、友人のものではなかった。それに、彼女がそのようなあだ名で梓を呼ぶことはない。

「……あ」

黒髪の少女はようやく理解した。よくよく考えてみれば住んでいる町から遠く離れた地にある別荘へ、憂が簡単に来れるはずはない。彼女は、平沢唯だ。

「あ、もしかして髪型で勘違いしたのかな？ お料理に邪魔だったから、くくっておいたんだ」

お料理と呼べるほどのものは作ってないんだけどね、と唯はくつくつと喉の奥を震わせて笑う。そうした無邪気そのものの様子に、梓は自身を縛りつけていた張り詰めたものが溶け出すのを感じた。

「さ、あずにゃん。こっちのテーブルに来て」

「はい」

招かれるままにテーブルへと着いた黒髪の少女は、見慣れないものが先輩の指に巻かれているのに気づく。少なくとも、別荘に来た

時には絆創膏などつけていなかった。それとも、記憶違いだろうか。

「あの、その指は」

「慣れないこと、するもんじゃないね。火傷しちゃった。えへへ」

屈託なく笑う唯を前に、梓は数回、口を開閉させた。まったくもって、かなわないと思ってしまう。仮に狙ってやっているのだとしても、だ。

「……唯先輩は、ずるいです」

「何か言った？」

「いえ、何でもありません」

梓は心底ため息をつきたい気分だった。ついさっきまで、ベッドの上で悶々と悩んでいた自分が馬鹿らしくて仕方がない。

「じゃ、あーん」

「は？」

目と鼻の先にいきなり突き出されたスプーンの上に乗せた粥と先輩の顔を等分に見やりながら、黒髪の少女は瞬きをした。もはや理解の範疇を超えている。どうすれば、こうも奔放に振る舞えるのか。

「ほら、あずにゃん。あーん」

「じ、自分で食べれますよ」

「いいからいいから。あーん」

「もう、いいですってば唯先輩」

なかなか口を開けようとしないう梓に、唯は不満そうに少し唇を尖らせた。

「私がそうしたいんだからいいの。なんなら、口移しがいい？」
「わかりました」

ひどい交渉術があったものだ。首を縦に振らなければ、この先輩は本当にやりかねない。要するに、『あーん』を受けるより他はないのである。

「ところでさ、あずにゃん」

もぐもぐと口を動かしながら首を傾げた黒髪の少女は、次の台詞を聞いて思わず口内の流動物を飲み込んでしまう。

「この場にいるふたり以外の名前を出したら罰ゲーム、だったよね」

いたずらっぽく笑う唯に、梓は何かが背筋を走るぞくりとした感覚に襲われて、我知らず上唇を舌の先で舐めていた。



「これはさすがにまずいだろ」

琴吹邸の一室、映像設備が整えられたその部屋で、律は声を裏返らせていた。もちろん、笑いを取ろうとしたわけではない。ただ、想定外の事態に直面して、ひどく動揺しているのだ。

「どうして？ もしお風呂場で倒れてしまったら、発見が遅れてしまいわ。そうしたら取り返しのないことになるかもしれないじゃない」

浴室に監視カメラが設置されている、そのこと自体が取り返しのつかない出来事ではないのだろうか。そう思いながらも、カチューシャの少女は何故か強く言い出せずにいる。

「律の言うとおりだ。いくらなんでもこれはひどすぎる」
「漣」

先ほどまでとは打って変わって、漣の瞳には強い光が込められていた。百歩譲って日常生活がカメラに映るのは許せたとしても、これを見逃すことはできない。いや、見逃せるわけがない。

「どうして？ 漣ちゃんは梓ちゃんのハダカを見たくはないの？」
「なっ」

絶句する黒髪の親友をかばうように、律が非難がましい目つきでふたりの間に立った。

「ムギ。どうして漣にそんなことを聞くんだ」
「ふふ。どうしてかしら」

紬はにこにこことほえむばかりで、内心を推し量ることができない。

「健康診断や修学旅行で、私たちは互いの体を見てるじゃない。これは、それと似たようなものだと思うの」
「全然違うだろ」

あっけらかんとした答えに驚いて、カチューシャの少女はかろうじてそれだけを口にした。互いに糸まとわぬ姿を目にするのと、一方のみがレンズ越しに裸を見るのではまるで意味が違ってくる。

しかし、律が追求の言葉を紡ぐよりも先に、紬は申し訳なさそうに深々と頭を下げたのだ。

「ごめんなさい、滯ちゃん。冗談が過ぎたわ」

「……冗談、だって？」

滯が特徴的な眉の友をきつとにらみつけ、何かを言おうとしたその時、緊張をにじませた声と共に袖が引かれた。

「背中、流し始めたぜ」

親友の言葉を耳にして、黒髪の少女はあわてて画面に目を向けた。梓は真面目な表情で、泡立てたボディタオルをせっせと動かしている。

「きつと、何かの罰ゲームじゃないかしら。ほら、梓ちゃんが出て行ったわ」

耳元で囁かれて、滯はぎょつとした顔で紬を見やった。だが、すぐにそっぽを向く。

「私の部屋を教えてくれ。気分が悪い」

「それはいけないわ。薬ならすぐに出せるけど」

「いい。横になればたぶん収まる」

黒髪の少女は淡々と言って、特徴的な眉の友人に背を向けた。言葉だけを追いかければ、気遣いがそこかしこにあふれている。それなのに、紬が口にする言葉の裏には悪意があるようにしか思えなかった。

Turn. 5 a.:「とにかく、一生懸命頑張るって、決めたんだし」

【湊's part】

——あの日も、今日のように太陽の照り付けが厳しい、暑い暑い日だった。唯はそう記憶している。

二年生と三年生の夏期講習が重なる日。夏休みでありながらも学び舎に集いて勉学に励むため設けられた日に、彼女たち放課後ティータイムは、あくまでついとして部活動を行うことにしていた。夏期講習が午前中で終了するためだ。

それが終わるが早いのか、部室へと駆け込んできた三年生の四人は、新設された空調を唯が耐えられる程度の冷房に設定し、紬が淹れたアイスティーで喉を潤していた。

そこに梓の姿はない。二年生の夏期講習は、未だ終了を告げていないらしい。

「おっそいなー、梓」

そう口にしたのは律だった。実際のところ、彼女たちが音楽準備室へとやってきてきたまだものの二、三十分の話なのだが、担任によって半強制的に参加させられた面倒な夏期講習からようやくと開放された反動もあってか、彼女の軽音に対する情熱は今日に限って高い模様だ。同じく紬が用意した果物三昧のタルトを片肘をつきながら頬張るあたり、その欲求不満げな様子と言うのと同じ空間を共有する誰しもが見て取れた。

「行儀悪いぞ、律」

と、滯が正しても、律は尖らせた唇の少し先にジト目を送るだけで何も解決はしない。それどころか両者の間には不穏な空気が流れ始め、律の視線を無言で睨み返す滯の構図は、彼女らの関係を知らない者に見られれば一触即発と表されても致し方のないものだった。

だがしかし、ここは桜ヶ丘女子高等学校軽音楽部の居住区である音楽準備室である。

最近になってちらほらと訪問者の数は増えていたものの、基本的に常駐するのは彼女ら軽音楽部に顧問の山中さわ子先生を加えた六人のみであり、あとは四人のクラスメートで生徒会長の真鍋和が時々訪れる程度のものなので、律と滯のそれが誤認されてしまう恐れと言うのは皆無に等しい。

ゆえに見慣れてしまった痴話喧嘩を本気になって仲裁せんとする者などこの部屋には存在しえず、ふたりが低い声で唸り始めた頃を見計らっては紬が「まあまあ」と窘めるのがもはやルーティーンと化していた。

それが、いわゆる日常である。

だが「ふん」と鼻を鳴らし律から視線をずらした滯が次に見た少女は、おおよそ日常とは掛け離れた難しい表情をしたまま、俯き加減で腕組みをしていた。そんな様子に、彼女は些かの違和感を覚えたのだろう。

「……唯？」

「ふえ？」

濡から上がった声に反応し、律と紬も彼女と同様に唯の方を見た。
った。

三者三様の視線を一身に受けた唯は、返事をした時にこそ瞬時に表情筋の緊張を解いたものの、しかしまた見慣れない、小難しそうな顔つきへと戻してはそれをなかなか崩さない。

「……どうかしたのか？」

次に口を開いた律は、訊きながら唯の方へと居直った。つい数瞬前まではその先にタルトが刺さっていただろうフォークを上下の唇でもって挟み、規則的に一定距離の往復を繰り返すその姿からは、濡のそれよか唯のことを深く案じていないことが容易に感じ取れる。三人からの視線を一樣に受け流し、目を合わせぬようにしていた唯がそれを感じえることはなかったが、しかしテーブルを間に置いて律の正面に腰掛ける濡は、そんな律の内心を的確に読み取っては、先程のお返しではないがジト目で彼女を睨んだ。四弦少女とてわかってしているのだろうか、唯の方を向いている律にその視線が届くことが無かったのは言わずもがなだ。

「うん、と——そう、だよね」

すると唯が呟く。

「言わなくちゃ、だよね。……やるからには」

「何をだ？」

「とにかく、一生懸命頑張るって、決めたんだし」

「……おーい、唯さーん？」

ぶつぶつと独りごち続ける唯に対し律の両目がだんだんと細くなり、訝しさを増していく。このような唯の姿を見るのは打楽器を愛

でる少女とて始めての事態だったのだから、少々致し方のないことだったかも知らない。

されど、そこまでだった。

「――んっ？」

律が、今度は目を見開いた。律だけではなく、漑もそうした。いや、自然とそうなった。そうせざるをえなかった。

唯は、唐突に立ち上がった。立ち上がって、先程まで疎ましい視線を寄越していた三人を、今度はこちらから、眦を決したと言わんばかりに目一杯瞳孔を広げた眼でもって一瞥し、宣言する。

水を打ったかのような静寂が訪れた部室内。六弦少女の宣言は、鈴の音よりもお凜然と響き亘った。

「私、あずにゃんを飼う」

――はあ？ と、律の口から絞りたての怪訝さを濃縮し孕んだかのような声が漏れるのが先だったか、はたまた口を不用意にあけてしまったがゆえに銜えていたフォークが重力に従って床に引き寄せられ、衝突しカランと言う金属音を奏でるのが先だったか。

彼女のシルバーが木目との対面を果たした証の旋律が部屋中を支配する。しかし、それに即座に反応するものは誰一人としていなかった。律も漑も、表情を固めたまま微動だにしない。

ややあって、唯の正面に座る少女が立ち上がっては床の上に転がった食器具の傍まで歩みより、それを拾い上げる。

「どう言うこと？」

紬はそのまま、唯に問うた。

「飼うの。あずにゃんを」

打てば響く。しかし彼女の返答は、鍵盤少女の納得するものでなかったのは言うまでもない。

しかし、紬は口を噤んだ。

手に持つシルバーの本来の所有者が、何かを言わんとせんことを察知したためだ。

「飼うって……」

突飛な宣言に呆気にとられようが、さりとてそれゆえに律は口を開かずにはいらなかった。

飼うとはどう言う意味なのか。

軽音部唯一の後輩部員に、この天然っ娘は何をしくさってくれるつもりなのか。

それらを理解できていないがため、訊ねなければならないことは多い。

「もう、決めたから」

だが唯は、律に有無を言わせるいとまを与えはしなかった。

決めた。そう強く言い放っては、眼光もまた鋭くただ一点を見つめ続けた。

「これが」

紬は、とうに気がついていた。

律もようやく気がついた。

その眼が、瞳の焰が、何を映し、照らしていたのか。

「私の、本当の気持ちだもん」

ただのひとり、唯の視線の延長線上に座す少女は、無言でそれを受け止めた。

何を言い返すことも無い――否、何を言い返せばいいのかが、わからない。

その少女は、たじろいでいたのだ。

「詳しく聞かせてくれない？」

だからこそ、滯にとっては視線の間に割って入ってきた紬のそれがありがたかった。

助け舟になりえたからだ。

されど、それには至らなかった。

開きかけた唯の口、出かかった心の丈が、勢い良く開け放たれた扉の音によって阻まれ、かき消された。

入室してきたのは、残された軽音楽部員。

二年生の夏期講習が終わったのはつい先程らしく、しかも予想外の延長戦だったとみえて、六弦を抱え飛び込んできた少女の顔は焦燥感で彩られていた。

息せき切らしつつこちらを向いた梓は、一言。

『ごめんなさいっ……』

「――！」

梓の口から幾度となく漏れ聞こえる謝罪の弁に、唯は息を呑んだ。真夏の別荘で、なおも梓に背後から抱きすくめられたままのみずからのカラダ。一旦は途切れるに至ったありし日の回想が脳内を駆け巡っては――あの日の決意が、いまの唯に訴えかけてくる。ただただ強い抱擁を受けるさなか、それは走馬灯とも言えたかもしれない。

熱に浮かされ、突発的に目の前のひとを抱きしめて放さない、見る者が見れば蛮行とすら揶揄しかねない梓の行動に直面した唯は、いつしかそれに流されていたのだろうか。強いと言えど、梓と唯には身長差もそれに比例する多少の体格差もある。……振り解くのは、大した問題ではなかった。

だが唯は梓の行動を否定しなかった。それは単に嬉しかったと言う感情と、別荘に来て後の、梓に対する自身の行動から来る背徳心とに由来したのだが――裏を返せば、一種の気の迷いとも言えたかもしれない。

（私は……あずにゃんを、飼うんじゃなかったの？）

いくら可愛い後輩が上手い切り返しをしてきたからと言って、唯の根底にある感情は覆らない。覆るはずがなければ、覆っていいはずもない。当たり前だ。このゲームの発端は、他ならぬ唯なのだから。

ひと時の気の迷いが、忘れかけていた元々の行動理念をこうして思い出させてくれるとは些か皮肉なものであったが、唯は深く気にしないようにした。いちいち気に病んでいたら、一週間と言う長丁場をとてもしゃないが乗り越えられそうにもなかったからだ。

「あず、にゃん……」

抱擁は、気がつけば抱きすくめられた当初よりも随分とチカラの弱いものとなっていた。

唯は自由に動かせる両の手を、梓のふたつの腕がクロスする場所へと持っていては、努めて優しくその交差を解いた。途端に束縛が取れ、一気に気だるくなるみずからのカラダ。過呼吸気味に運動する肺機能は、さりとて数秒のうちに平常運転へと切り替える素振りをみせた。体調面は、あまり問題はなさそうだ。

一方梓は唯によって自分の腕が解かれるや、ふらっと背後に倒れ込んで起き上がらない。呼吸は――している。しかしそのスピードは心持ち早い。眠ってしまったのだろう、唯はそう思った。

ならば、こんなところで寝かせておくわけにはいかない。

「よいしょ、っと」

唯は立ち上がると、梓を両腕で抱きかかえてリビングを出た。寝かせておく部屋は、この別荘に来てすぐに荷物を置きに行った部屋にした。寝室として使う予定でいたのだし、梓とてそれに異を唱えるとは考えづらかった。

抱きかかえた梓のカラダは、気が抜けたぶんだけ重たく、そして熱っぽい。

それだけ彼女が無理をしていたのかと思うと、唯の胸はきつく締め付けられる。

さりとて唯が目的を見失うことは、もうないのだろう――確証なく、ありはしないのだが。

Turn. 5 b..「……なんだよ、それ」

同じ頃、琴吹邸の一室から半ば逃げるように退室してきた漣と律は、紬に教えられたとおりの場所にお手洗いがあることを確認し、連れ立って中へと入っていった。

しかしながら、ふたりにはこの場所に来なければならない確固たる理由がない。言いだしっぺの漣には、可及的速やかに便意を処理しなければならぬ必要はなかったし、律についてはあの部屋の、何とも形容しがたい雰囲気のもと紬とふたりきりになることを嫌ったがために立ち上がったのだ。さりとて何もしないまま帰れば、紬に訝しがられてしまうかもしれない。それらしく取り繕ってから再びモニタールームへと戻った方が無難なのは火を見るより明らかだ。

ところで、琴吹邸のお手洗いはふたりが想像していた以上に広いものだった。言うなれば公共施設や学校のそれと見紛うほどで、ひとつの部屋に二、三の個室が存在し、手洗い場も比例した数だけが設置されてある。その前方には鏡も備え付けられている。

律は隣で鏡の中を覗き込んでいる漣を見た。
酷い顔をしている、と思った。

「大丈夫、か？」

居た堪れなくなり、律は声をかけた。だが声をかけてから、なんと野暮なことを尋ねたものかとみずからを責めた。大丈夫でないことなど、もしかしたら漣が自覚するよりも的確に感じえているかもしれないのに。

自分が席を外したのは、そんなことを漣に言うためだったのか。

「……ごめん」

対してそう返事した漣の胸中とはいかがなものだったのだろう。肯定でも否定でもなく、謝罪をした漣。されど彼女が何か謝らねばならないことをした覚えなど、律にはない。

「なっ、何も、謝ることなんてないだろうっ？」

澁刺と、律は漣に言う。それと同時に、彼女は内心かぶりを振った。

その通りだ、と。

漣が謝ることなど何もない。もし深い碧を真っ白に染め上げかないほどの不快感、不安やストレスを漣が感じているのならば、むしろ謝罪をすべきなのは、あたしだ……と、思った。

——律の脳内が、ある夏の日の午後の出来事を回顧する。

今日のことを誘われたのは、街で偶然出会った紬との別れ際だった……買い物の用事があった紬がそれをキャンセルし、律と共に街を歩いた日。

それは、いま思えば紬をぶってしまったことに対する彼女なりの『お礼』なのかもしれない。

「え、明後日？」

「そうなの。時間ある？」

「紬は突然、律を自分の家に招きたいと告げた。

「あると言えば、あるけど」

「ほんと？　じゃあ決まり、ってことでいいかしら」

「でもどうしたんだ、いきなり」

「用事もなく友達を呼ぶのは、やっぱり変？」

「いやそうじゃないけど……」

琴吹邸は常に何かしらの予定がまっている、そう言っていたのは他ならぬ紬自身だ。ゆえに唐突過ぎる誘いが、律には少し腑に落ちなかった。

対し紬は、淡く笑ってみせる。

「この間の部活、覚えてる？」

「この間って言うのと、唯の」

「そう、梓ちゃんを飼うって言った日」

律は首を縦に振った。

忘れるはずがなければ、簡単に忘れられるはずもない。元よりあの日からまだ一週間も経過していない。忘れる方が至難の業だ。

「あの後ね、実は動きがあったの」

「動きだって？」

ええ、と言って紬は事の顛末を律に話した。

あの日の帰り、唯がすぐに梓へとアプローチしたこと。

梓は臆するどころか、逆に唯を飼いましょうかと言いつ返したこと。

唯が、それに同意したこと。

そして梓が、唯を服従させるための舞台を、紬に提供するように求

めてきたこと。

「びっくりしたわ。唯ちゃんのアプローチの早さもだけど、何より梓ちゃんの返しが、ね」

紬が軽やかに唇を動かし続ける間、律の背が、何度凍りついたことか。

紬が驚くのも無理はないだろう。だが律は、驚くと言う表現だけで済みそうな程度ではなかった。

それでも、戦慄はまだ続く。

「貸したのか？」

「もちろん」

野暮なことを訊くのね、とでも言いたげに、紬は真顔になって答えた。

「あ、あのふたりが何をしようとしてるか……わかってるのか？」

——声が、珍しく震えていた。それは戦慄の名残か、はたまた単純な怒りか。

しかし。

「わからないわ」

淡々と。紬は当たり前のことを当たり前にするが如く、律の胸の中へと言の葉を届ける。

「何をしようとしてるのがわからない、だから、知りたいの」

紬は、律の瞳を直視した。逸らすに逸らせないその鋭い眼光に、律は少したじろいだ。

「ふたりがどこに向かっていて、そしてどこに辿り着くのか。私はそれを知りたいと思うの。もしりっちゃんもそれを知りたいと思うのなら、明後日の午後一時、私の家に来て。手隙がなくて、お出迎えを遣わせることはできないけれど……明日のお昼までに、お返事を頂戴ね。そうしたら、家の場所を教えるわ」

そこで紬は一旦会話を切った。だがすぐに「あ、そうだ」と呟いては、

「勿論、滯ちゃんにも来て欲しいのだけど……これを滯ちゃんに伝えるかどうか、そこはりっちゃんに任せるわ」

ニコツと、律に笑って見せた。

「なんで、あたしに」

律は、ただ呟いた。誰に言うわけでもなく、紬に訊くわけでもなく。

「りっちゃん自身の問題だから、よ？」

それに対し、紬はもう何度目になる冷めた眼で律を見た――蔑視した。

「両手で目を覆ったって、時間は勝手に流れていくのよ、りっちゃん」

「……………」

律は、何も答えられない。

「素敵なお返事、期待してるわね」

紬は律の顔に背中を見せ、律を置いて帰宅しようと歩き出した。

「ムギは——！」

その背中に向け、律は声を投げた。名前を呼んで、されどその後の言葉が喉に引っかかってなかなか出てこない。

しかし、紬にはそれだけで十分だったようだ。半身ながら律の方を振り返っては、

「私は、どちらの味方にもなりえて。でもどちらの味方でもないわ」

それだけを言い残すと、足早に律のもとから去っていった。

律は、止めなかった。止められなかった。その歩を止めるための言葉が、何一つとして思い浮かんではこなかった。

「——律？」

思考の外から、声がかかった。滯の声だ。

視界が白く霞んだ状態から、明るく綺麗な白い部屋とそれを背景に自分を不思議そうに見つめてくる親友の顔、すなわちリアルタイムを映し出すものへと瞬時に移り変わる。そうだ自分は滯と一緒に

あの部屋から離脱して、ここで酷い顔をしていた四弦少女をなんとか励まそうとしていたんだ、と言うところまで思い出しては、律は自分が滯を存在を失念し回想に没頭してしまっていたことに少し腹を立てた。

いますべきは、それではないだろうと自戒した。

「ごめん……ちょっと考え事してた」

「……そっ、か」

滯は歯切れ悪く、頷いた。

「もっかい言ってくれるか？」

律は言う。しかし滯は、それを拒んだ。

「いや……大したことじゃないし」

「なんだよ、水臭いな。あたしと滯の仲じゃなか」

「……なんだよ、それ」

「——えっ？」

滯の呟きに、律は聞き返すのが精一杯だった。

……なんだよ、それ。なんだよそれ。ナンダヨソレ。

その意味が、正しく理解できなかった。

滯もまた、発言の後「しまった」と言わんばかりに、息を呑んでは顔を蒼く白く変えていく。

その様は。慌てると言うよりは、怯えに似ていたかもしれない。

「違う、なんでもないんだ！ほんとに、なんでも——」

赦しを乞うかのように、瞳に滴を浮かべ必死に弁明をする。それだけ濡の中ではそれが大きな失言なのだろう。彼女の姿が、律には痛々しく映る。

「いや、言いたくないんなら、深くは追求しないし……」

律が半ば宥めるようにそう言うと、濡は加速しかけていた呼吸を徐々に整え、最後に小さく「ごめん」と呟いた。

「そろそろ、戻ろうぜ。たぶんムギも、待ちわびてるだろうし」

うん、と濡が返事をし、ふたりは来た時同様に連れ立ってお手洗いを後にする。

廊下を並んで歩きながら、律は気がついてしまった。それはいまが、紬に聞かれることなく濡と話をするための絶好の機会だったにも関わらず、話したいことの半分どころか僅かしか言葉を交わせていない、と言うこと。

ならばあたしは、何をしに濡についてきたんだ――

「お帰りなさい」

暗い顔の濡と複雑そうに顔を歪める律を、紬は晴れやかな表情で迎え入れた。

彼女は「遅かったわね」とも「どうしたの」とも口にはしなかった。紬にとって、そんなことはどうでも良いと言うことなのだろうか。それが、どちらの味方にもなりえて、さりとてどちらの味方でもないことを宣言する紬のスタンスなのだろうか。

代わりに、紬はふたりが席を外してからいまに至るまでの別荘の状況を教えてくれた。

「ふたりがトイレに立ってから、唯ちゃんが抱きついた梓ちゃんの抱擁をすぐに解いたわ。梓ちゃんはそのまま眠ってしまったみたいで、唯ちゃんが抱きかかえて梓ちゃんを寝室に連れて行って……唯ちゃんはいま、リビングにいるみたいね」

掻い摘んで話す紬の経過を受け、律と滯はモニターを見やる。

そこに映し出されていたのは、リビングにて携帯電話を手にする平沢唯の姿だった。

Turn. 5 c. (これで、おあいこだよね——)

梓を抱いたまま寝室へとやってきた。入り口に比較的近いベッドにその華奢な体軀を仰向けに寝かしては、彼女の睡眠の妨げとならないよう、奥にある窓まで歩いていきレース地のカーテンを閉める。

「————ふう」

気を失っている人間を運ぶのがここまで大変だと、唯は初めて知るに至った。

普段からわりと重ためのギターを使っているためだろうか。梓を抱え運ぶ途中、みずからにそこそこの腕力が備わっていたことを実感しては、人知れず感激したりもした。それでも大変だったことは額に浮かぶ汗が物語る。手際の悪さもあり四苦八苦しながらも、何とか運び終えてみれば、心身ともにそれなりの充実感でみたされた。額に浮かぶ汗を拭って、唯は瞳を閉じる後輩を遠目から眺めた。熱の影響もあってか、その顔は少し汗を掻いている。

再び梓の元へと近づいて、唯はポケットからハンカチを取り出し数多の滴を拭き取った。そしてベッドの端に腰掛けては、小さく寝息を立てる女の子に視線を落とす。

無垢。この娘の寝顔は、そう表現するのが一番良い。

熱に浮かされながら、それでいて比較的穏やかに、スヤスヤと眠るツインテールの六弦少女。その顔はいまに至るまで幾多もの無理を重ねてきた、と言うことを唯が知りえているがゆえに、穢れなく、ただただ白く、彼女を見下ろす先輩のふたつの瞳に映し出されているのだろう。

「あず……にゃん」

もう何度口にしたのかわからない、可愛い可愛い後輩の愛称を小声で呼ぶ。勿論だが、この程度の声量で夢幻回廊を目下散策中の梓が起きてしまうはずもなく、室内にはなおも彼女の寝息だけが小さく反響した。

「……ん？」

顔の方から全身をくまなく眺めだしていた唯は、不意に声を上げた。

梓のポケットが膨らんでいる。

（携帯……にしては膨らみ方がおかしいし、なんだろう、これ）

それは小さめの小筒をポケットに入れたときのような膨らみ方をしていた。

（寝返りでもしたら、あずにゃんの足が痛くなっちゃうかも）

それが単なる気遣いでも老婆心でも、そこに好奇心が微塵もなかったのかと問われたら、うんと答えれば嘘になる。ただその気があるうとなかろうと、結果として唯が梓のポケットに手をつっ込み、探り、中の物を取り出したという事実是不変である。今後梓に対し弁明しなければならなくなった際に、もしかしたらこの興味本位が後ろめたさを生むこととなるやもしれないが――その時は、その時だ。

つまるところ。

唯はこのポケットに入っている物が、善し悪しで言えば悪しの類

の品であろう可能性など、全くの度外視だったのだ。

「……………これ、は？」

案の定、とでも言うべきか。

梓のポケットから出てきたのは小瓶だった。

唯は『それ』を目の前まで持ってきては、ラベル以下全体をくまなく観察する。

「……………！」

無言は、手に持つ『それ』が何かを正しく理解した証だった。『

それ』が何かもわからない程、唯は世間知らずではない。

投げ捨ててしまいたい衝動を必死に押さえ込み、唯は手に持つ『それ』を自分のポケットにしまった。

続けて視線を再び梓に戻す。

その顔からは——色濃い疲労感と哀切の色が窺えた。

「……………」

おもむろに。唯は上体を動かしてはみずからの頭部を梓のものの正面、閉じた瞼と繰り返される呼吸をより間近に拝める場所、すなわち顔の上方へと持ってきては、仔猫のような後輩の、そのただ一点を目指して降下を開始する。

閉じゆく瞳は、梓に倣ったがゆえ。朱に染めた頬もまた、そうだと言えたかもしれない。

終着地点は、双子の山を成す薄桃色の膨らみ。

その、両の頂。

（これで、おあいこだよね――）

心の中、唯は自分に暗示をかけるが如くそう呟いた。無抵抗な人間の唇を奪うなど、倫理的に考えれば咎められて然るべきである。もしそれが彼女のハジメテを盗むことになるのなら、果たして唯は咎められるのみで済まされるだろうか。ばれなければどうと言うことはないが、さりとて絶対にばれないと言う確証はない。

梓が処女か否か、そしてハジメテを大切にできるかなど、唯が知るはずもなく――しかしいまは、梓の感情を一切汲む気にはなれない。大体、もし先程の紅茶を飲み込んでいたのなら、今頃唯は後輩の思うままになっていたかもしれないのだ。嘘だと、杞憂だと思いたかったが、残念なことに物証がいま、唯の手元にある。

（あずにゃんが悪いんだよ……）

彼女のパーソナルスペースに悠々と侵入しては、もう目標まで十数センチと迫った互いの唇……柔らかな息遣いが、間近で響く。

接触を果たすのは、時間の問題だ。

――そのはずだった。

「……………せん、ぱ……………い」

梓の口元が、動く。途切れ途切れながらも誰かを呼ぶ、そのための言葉を紡ぐ。

唯は瞬時に戦慄し、瞳孔を極限まで見開き、たった数センチの距離を残して全身を硬直させてしまった。鼓動は高鳴り、周囲の雑音が何一つとして耳に届かなくなる。そして次第に、ふたつの唇が相対する数センチの間には見えない壁が形成され――

壊せないほどの、強度と成した。

「――――」

心拍数の低下が見られない中、それでも多少の冷静さを取り戻した唯はすぐさま梓の傍から離れた。ギリギリまで近づいた姿を、見られるわけにはいかなかったからだ。事後ならいくらでも口から出任せられようが、現行犯では何の言い逃れもできない。

勢いそのまま、ベッドからも降りて扉の付近まで退く。木製の板に背中を打ち付けて、そこで唯の後退はひとまずの終息をみせた格好だ。近づき過ぎた反動は、それほどまでに大きかった。

『ガタッ』と鳴り響いた音に唯は内心驚愕し、わなわなとその場へたり込む。その音が果たして何に由来するものなのか、それを知りえる頃には震えていた心もようやくと落ち着きを取り戻し、なぜこうして扉の前にへたり込んでいるのかを思い返すだけの余裕も生まれ、しかし答えを見出してはそれまでの余裕を全て投げ捨て、咄嗟のうちになおベッドの上にいるだろう梓へと視線を向けた。

「――――」？

遠目からだ判断しにくい、と唯はドアノブを支えにゆっくり立ち上がる。そして改めてベッドの方を見やれば、そこには先程までと何ら変哲のない仔猫の安らかな寝顔が存在した。

「……………寝言……………だったってこと？」

脱力感が口からも漏れ、唯の腰はふたたび、淡い色のカーペット上に落ち着いた。

この期に及んで、なんと間の悪いことだろうか。

梓が失敗しできなかった、相手に対する精神的優位性を確保するための絶好の機会だったと言うのに、とんだ興ざめである。

(これじゃ、ほんとにおあいこじゃない……)

両者ともに講じようとした策が未遂に終わったと言うのなら、それは文字通りの引き分けになるう。

だが唯は、内心どこか薄気味悪がっていた。それは梓のタイミン
グの良さ——唯にとっては悪いことこの上ないのだが——に、ほぼ
全てが由来する。良すぎたがために、彼女は少女の寝顔に対し懷疑
心を抱く。驕りが過ぎると批難されるやもしれないが、しかし相手
は唯よりも器用な梓である。

だから、考えてしまう。

もしかしたら彼女は、顔も呼吸も偽ったまま唯の接近を受け入れ、
寸止めし、唯の慌てふためく様を見ながら内心ほくそ笑んでいるの
ではないか……。

『それより、唯先輩が私に飼われてみませんか？』

梓に言い寄った昼下がり。予想外の返事をしてきた後輩の、あの
微笑が回想される。

『そんなの、やってみなくちゃわからないじゃないですか』

自信ありげなその立ち振る舞いは、この展開を望み、そして取り
こぼすことなく達成できることを確信していた、その表れだったの
か。

『私、唯先輩に『飼われたい』って思わせてみせますから』

「……………っ！」

戦慄と表するにはおこがましいほど、唯の心身は共に震撼した。彼女の手のひらの上でいまなお踊らされていると、知り得たがゆえだった。

それを怖いと感じてしまうのは、もはや致し方のないことなのだろう。

『バンッ』

勢い良く扉が開け放たれ、閉じられる。ひとりの退室によって生じたその音は、真に梓が目覚まし飛び起きかねないほどの轟音となり、豪華な別荘内に反響した。

されど唯は構わない。構っている余裕など、持ち合わせていない。聞こえない振りをして、走る。

いまはただ、梓のもとから少しでも遠く――

「……………あ」

三十秒とかからぬうちに、唯は見覚えのある広間に辿り着いた。リビングだった。

つい先程まで、ふたりが共に過ごしていた場所――普段とは違ったぎこちない雰囲気の中、互いが互いを観察し、どちらに転ぶともわからない主従ゲームの勝機を見出そうとしていた、その始まりの場所。別荘の間取りを熟知していない唯がリビングに足を踏み入れたのは、ある種、帰巢本能が働いたためだろうか。しかしそのせいで、唯は自分がやると言って等閑になっていたひとつの仕事を思い出すに至った。

テーブルの上。湿った台拭きと、完全に拭き取れていない紅茶が目についたのだ。

「そう、だった」

思い出すが早く、唯は作業の残りに取り掛かった。

右手を左右に動かし、零れた……否、自分が嘔き出し、卓上にぶちまけてしまった紅茶を拭き取る。

果たして、中断せざるを得なかった舞踏会の終焉は、いとも容易く迎えられた。

しかし唯は、役目を終えたはずの布巾に右手を添えたまま、その場から動けずにいた。

対して左手は、みずからのアンダーバスト周辺——梓によって締め付けをうけた、その場所にある。

ものの十数分前の話なのに、ひどく懐かしんでしまっているのはなぜだろう。

加えてここまで、怯えきってしまったのは、なぜだろう。

「——何してるんだろう、私」

自嘲気味にそう呟いては、唯は台拭きと胸の位置から両手を離して座り込み、膝を抱いた。顔を埋め瞼を閉じ、双眸に入り込もうとする光の全てを断ち切ろうとする。

現実から、逃げたがる。

「意味のないことをやって……やってもないのにこんな気持ちになつて……これじゃあ、ただの馬鹿じゃん」

意味のないこと——梓へのキス。衝動的に奪おうとした彼女の唇も、さりとてツインテールの少女がそれを認識していない限りは、

いくら精神的優位性を謳おうと何ら意味を成さない。杞憂ばかり、取り越し苦労ばかりを案じていた唯はそれに気がつき、落胆した。それであっても、唯が梓の唇にみずからのものを重ねようとした事実は変わらない。またそれは、口付けをしようとした唯の気持ちも同じことが言える。

――十数分前に、それを再確認したばかりではなかったか。同じ轍を踏んでしまったことの後悔は、唯がそれを強く意識せずとも強力に彼女を緊縛した。言い表しようのない重圧に身も心も締め付けられ、唯はただ、塞ぎ込むことしかできなかった。そんな折、

『――――♪』

携帯の、着信音が鳴り響く。ポケットから漏れる、くぐもつていながらも軽快さを失わないメロディは、重苦に満ちたりびングの中にあつてはひどく滑稽にさえ思えてしまう。

唐突に紀律のとれた音階を奏で始めた我が携帯端末に驚き、刹那を数えぬうちに歪めていた表情筋を張りつめ光の中へと飛び込ませた唯だったが、その調べが場に相応しかろうともしくは滑稽だろうと、長々とそれを聞いていたという気分ではない。どちらであれ、いまの彼女にとっては邪魔でしかなかったのだ。

だから……切ろう。掛けてきてくれた人には悪いけど、いまはとも話をする気分ではないから。

そう思いながら取り出した軽帯電話。ディスプレイを開き、親指を終話キーに合わせ――押すことはなく逆に通話を開始する、そのためのボタンへと指を動かした。

予想外だった。

「……もしもし」

『もしもし、お姉ちゃん?』

唯一無二の妹の声が、スピーカーから漏れる。

「どうしたの、急に?」

できる限りの平静を装い、唯は訊ねた。

『あ、えっと……』

すると憂はなぜか返事につまる。電話を掛けてきたのは向こうなのに、おかしなの――そう思えど、さりどて唯がそれを口に出すことはなかった。

『もう、着いたのかなって……てつきり、到着したら連絡がくると思ってたから』

憂の口調に少し焦りが生じているよう感じてしまったのは、恐らくは唯の身を案じていた、そのことを直接的に言い出すのが躊躇われたせいだろう。思えば毎回、遠出をする際に到着すれば憂にメールを送っていた。修学旅行時ほど頻繁にはないが、メールのやり取りも行っていた。それが今回に限った話では、いまのところ皆無だ。

「そっか……ごめんね、無事にちゃんと着いたから大丈夫だよ」
『ううん、それならいいの。何にもないようで安心したから』

唯は、即座に返答できない。別荘についてからいまに至るまで、果たして何もなかったと総括していいものだろうか。

『……お姉ちゃん?』

沈黙は、唯が感じ得るよりも電話口の実妹にとっては長々としたものだったのだろう。姉に対し問いかける、物優しい声音が鼓膜をくすぐる。

「あ……ごめん」

『どうしたの? 何かあったの?』

それは、訊ねる側からしてみれば至極当然の文句と言えただろう。だからこそ唯は、逡巡する。

憂に対し打ち明けるべきか、迷う。

『お姉ちゃん……大丈夫?』

「あのね」

——唯は、口を開いた。憂に案じられて、それが決定打になった。いま心配されるべくは、自分ではなく梓の方なのだから。

「あずにゃん、寝込んだじゃったの……」

Turn. 5 d..「な、何見てるんだよ……」

「お茶など、いかが？」

戻ってきた律と漑が所定の位置に腰掛けたのを見計らって紬が言った。

自分がいまいる場所から見て向こう側にあった壁掛け時計を律が眺めれば、なるほど確かにお茶会に興じても何らおかしくはない時間帯であることがわかる。

「さっきも言ったけれど、ふたりのためにお茶もお菓子も奮発してもらっちゃったの。テーブルの上にメニューリストがあるから——メモ書きで申し訳ないんだけど——希望のお茶とお菓子を教えてもらえるかしら？」

言われて、ふたりはテーブルの上におかれていた一枚の紙を覗き込んだ。

メモ書き、と紬は言ったが、漑が手にしたメニューリストはワープロ字のうえにラミネート加工まで施してある代物だった。紙上の装飾は華やかと言うよりは落ち着きがあり、豪華な印象の琴吹邸にあつてどこか淡泊だと言えれば共感する部分もあるのだが、彼女たちがいるのはレストランでも喫茶店でもない。自分たち三人、いや主催者の紬は内容を把握しているだろうから律と漑、たったふたりだけにしか使われないであろうリストにここまでしてもらふことですから恐縮物なのに、これ以上を求めるのは無礼極まりない。どうあれ彼女らにとって十分すぎることには変わりなかった。

「ん、じゃあ」

まず声を上げたのは漣だった。

「私は……アールグレイと、クラシックショコラ」
「わかったわ」

紬が返事をし、今度は律の方へと視線を向ける。

「あ、あたしは……」

紬だけでなく、漣も律の方を見る。いつもならなんでもないオーダーも、今日に限って、この場に限っては意味もなく緊張し、同時に急かされているようでなんだか落ち着かない。

「……いろいろありすぎて、迷うな」

リストアップされた飲み物とお菓子の総数は、合わせて五十を超えていたのだ。

漣は鼈員のパティスリーで売られているガトーショコラを普段から愛でるがゆえ、即座にクラシックショコラを選んだのだろうが、そう言った理由が律についてはない。

「なら」

と紬が言う。

「飲み物だけ選んできたら、スイーツは私が選んで持ってくるわ」
「ん、ああ……じゃあ、それで」

飲み物はダージリンで。律が紬にそう伝えたと「頼んでくるから、少し待っててね」と言い残して紬は退室して行った。

モニターを目の前にして、またしてもふたりきりになった律と漚。チャンス潰してしまったことを悔いていた矢先の出来事だけに、律は内心拍子抜けしてしまっていた。

かと言って、何を話したら良いのやら——幼馴染なだけあって、律は漚相手では他愛のないことでも普段なら笑い話にすることができる。しかし現状は、残念なことに『普段』とは言い切れない。

ならば異常か。そう問われれば、律のかぶりは縦に振られかけるが振り切られず。異常と断定するには何か決め手を欠いている気がして、どこことなく気持ち悪くさえある。

こうして友人の家を訪ねることが異常とはとてもじゃないが言うことはできない。が、しかし現在自分たちがおかれている状況を鑑みれば、紬のあの誘いは異常への扉——普段ではない『現実』へのいざないだったのだ——だろうか？

見ないこともできたはずだ。だがふたりはいま、琴吹邸にいる。それは言わずもがな律が漚を誘ったからに過ぎず、そしてこの場にこうしているのは彼女ら自身の意思によるものだ。

それでも、わからない。

あたしはなんで、ここにいるんだろう——

果てのない自問自答を漚にぶつけるわけにもいかず、結局はふたり一緒に唯と梓の動向を見守るしかなかった。歯痒さを覚えるが、遠く離れた別荘にいるふたりに対し律や漚ができることなど何もない。大体、何故歯痒いのか。いまの律は、それにすら明確な答えを出すことはできなかった。

ところで画面の向こうでは、なおも唯がフローリングのうえに座って携帯電話を手に誰かと通話しているようだった。音声録音はされていないのか、会話の内容がこちらまで聞こえてくることはない。詳細な顔色までを窺い知るには至らないが、肩を揺らす仕草がないだけ真面目な話をしているんじゃないかと、何と無くだが律はそう

思った。

「何話してるんだろな、唯」

眩きが漏れる。半分は滯に向けて話しかけたつもりだったのだが、当該の人物からは何の反応もいただけなかった。

無言と言う結果に若干顔を歪めつつ、律は隣に座る滯の方を振り向く。

次の瞬間、カチューシャの少女が見た彼女の横顔は先程鏡を覗き込んでいた時とはまるで別人のそれだった。

つまりは、無表情に鋭い眦——長い付き合いであっても、四弦少女のこれは滅多なことだ。

そのため滯が律の視線に気づくまで、彼女はずっと強い眼光を浮かび上がらせる白皙と碧のコントラストを堪能することになる。

「な、何見てるんだよ……」

体感でだが四、五分はそのままだったかもしれない。それだけ滯が画面に映し出されるクラスメートの行方に関心を抱いていたと言うことなのだろうが、ひとたび律に気がつけば頬を少々朱に染めて顔を引きつらせる。

「あっ……ごめん」

いつもならここで二言三言茶化しを入れるのがふたりのやり取りだが、しかし数秒前までの滯の瞳と蔓延する重い空気に気圧されたのか、律はそのまま謝罪した。普段とは違い素直な態度を見せた律に、滯はどう対処すべきかを思案するでもなく再びモニターの方へと向き直った。——これでは、会話にならない。

気まずい。

滯と共にいて、よもやこんな気持ちになるなんて……打開策を見出すことなど儘なるはずもなく、律は胸中嘆息した。柄にもなく泣いてしまえば楽かとも思ったが、それだけはいけないとひと時でも馬鹿なことを考えた自分を叱咤する。涙は安売りしない、そんなちっぽけな矜持が、いまはとても大きく感じた。

——考えても、仕方がないな。

雑念を振り払って再びモニターを覗けば、恐らく彼女が滯を見つめ続ける間に唯は通話を終わらせていたのだろう。今度はキッチンに立って何かを始めようとしていたさなかだった。

「お待たせ」

時同じくして、ふたりが在する部屋のドアが開かれる。

紬が戻ってきた。

「いろいろあると、やっぱり迷うわね」

苦笑する紬の後ろには、琴吹家のお手伝いさんだろう女性がひとり。その前には、ワゴンとそれいっばいに乗せられたケーキや焼き菓子、あらかじめお願いした紅茶とおかわりをいただくための茶葉とポットが見える。

「ありがとうございます、またお願いね」

そう言ってお手伝いさんを引かせる紬。一礼して去っていく女性を見送った後、彼女はきばきとテーブルのうえにモノを並べていく。部室で見慣れた様とは言え、ふたりは一樣に感心してしまっていた。

「さて、遅くなっちゃったけど、お茶にしましょ」

その一言で、部屋の空気が一気に和らいだ気がした。少なくとも、律にはそう感じた。

いつもの放課後より、豪華なティータイム。英国の形式ばったアフタヌーンティーとはいかないが、フランクな、自由なお茶会の方が彼女たち放課後ティータイムにはお似合いだ。

そんな気軽さのせいだろうか、琴吹邸を訪れてこちらずっと難しい顔をしていた滞の手が、よく動く。緊張からくる喉の渇きは律にもあったが、真の当事者である滞となればその度合いも生易しいものではなかったのだろう。後日、間違いなく体重計の上で悲鳴をあげるだろうことが容易に想像でき、律はくつくつと笑った。

「どうした？」

問いかける滞に、律は笑ったまま「いや、別に」と答える。「変な律だな」と滞が返せば、紬はただただにこやかに微笑むだけだ。

いつもの放課後が、そこにあった。

勿論全てを完璧に模写できているわけではないが、先程までの雰囲気からは想像できないほどに部屋の中は明るい。音楽準備室の延長線上だと、誰しもが認め得るものだ。

ゆえに、律は思うのだ。

こんな時間が、永遠に続けばいいのに——と。

「……ゲホッ、ゲホッ」

しかし、それは唐突に起こる。

まるで『願いなど聞き入れるまでもない』と、そう言って瞬時に律を突き放すかのような神様の意地悪さを感じるほど突然の出来事だった。咳き込んだ少女は途端に顔を歪め、持っていたティーカップをソーサーの上に置く。カタン、と割合小さな音が響けど、対して彼女の姿からは穏便にはいかない様子が窺えた。

「みおっ！」

悲鳴にも似た律の声。すぐさま滞の元へと寄って行つては、肩を抱き背中をさする。けほけほとなおも辛そうに呼吸を繰り返す滯も、さりとしてしばらく時間が経過すれば一応の落ち着きは取り戻したようだった。

「……大丈夫。紅茶が、ちょっと気管の方に入っていたただけだから」

その言葉に律は内心、ほっと一息をついた。顔の緊張がしだいに緩んでいくのがわかる。

「――ふう」

すると聞こえる、小さな溜息。律のものでも滯のものでもないそれに、ふたりは瞬時に家主の方を見る。ついでに律は、苦しそうに咳き込む滯をアイスコーヒーを嗜みながら傍観していただけたかった絨に向ける目をキッと強張らせた。

対して当の絨はふたりの視線など素知らぬ振りでモニターを眺め続ける。何か口に出そうにも先方のあの様子ではまともに取り合つてくれそうにもなく、これでは埒があかないと不服ながらも視線をスライドさせた律は、しかし視界に入り込んだ映像を見るや刹那一切の怒気を彼方へと葬り去ってしまう。

「な、あ……」

——恐らく滯は、『これ』を見たから噎せてしまったのかも。な
どと呑気に考えるいとまなどありもせず、彼女はただただ頬を紅
潮させるしかなかった。

何せ画面に映し出だされていたのは別荘に住まうふたりの一糸纏
わぬ姿なのだ。それをいきなり見せつけられてなお平常心を保てと
言う方が無理難題に近いだろう。

「これはさすがにまずいだろう！」

Turn. 5 e..『……素直になればいいんじゃないかな』

『ええっ!?!』

実妹の絶叫が携帯電話を介して耳に届いた。致し方ない反応だろう。様々な感情が交錯し薄らいでいるものの、別荘に在す唯一の先輩として梓のダウンには驚かされているのだから。

『だ、大丈夫なの、梓ちゃん……?』

「大丈夫、だと思う。多分少し具合が悪いのを押して来ちゃったからだと思うんだけど……いまは、ベッドで寝てるし」

唯が努めて冷静に説明すれば、憂の声は些か落ち着いたようだった。

『そっか……無理しちゃったんだね』

「えっ……?」

『だって——』

何かを悟った様な憂の反応に、唯は思わず息を飲む。対して電話の相手はさも当然と言わんばかりのことを口にした。

『これが最後になるかもしれないんだよね。お姉ちゃん達と行く合宿』

「――あ」

失念していたわけではないが、言われてみれば確かにその通りではある。唯達三年生にとってのこの休暇は、同じ高校生として一年下の後輩と過ごす最後の夏休みだ。桜ヶ丘女子高を卒業した後の進路を未だ明確にしていけない唯にしてみれば、今後の選択如何では梓と触れ合う機会のみならず会える時間そのものが激減する。

逆もまた然り、だ。

「そう、だよね」

梓が無理をする理由が、少しだけわかったような気がした。遥かな流れを成す時間の、その一瞬、一コマさえ、もしかしたら彼女は無為に過ごすのを嫌っているのかもしれない。それがどのような感情に由来するものなのか、そして誰に、どのように抱いているものなのか。自分の持つものと同じなのかどうかを唯は知り得ないが、さりとてそれが負の感情に起因するものだとはい底思えない。

――彼女が他人の心を弄ぶなど、あり得るはずがない。

「……ごめん」

次第に恥ずかしくなり、人知れず赤面し、気がつけば無意識のうちに謝罪の言葉が漏れていた。『えっ?』と訊ね返す実妹に対し有耶無耶に返事をするも、しかし同時に唯はもうひとつ思い出したことがあった。

こちらは、完全に失念していた。

いや本来ならば、失念していようと何ら問題はなかったはずだ。

憂から電話がかかってくる可能性など、六弦少女の想定の外だったのだから。

『そう言えば……………やけに静かだけど』

つまりは。憂に対してついた嘘。

『他の皆さんは？ 一緒じゃないの？』

——結局ね、今年もムギちゃんの別荘で合宿することになったんだよ。

「あ……………うん、と……………」

言葉に詰まる。

『どうしたの？』

屈託なさげに問いを重ねる憂に、唯は焦燥と居心地の悪さを同時に感じた。ふたりきりでの外泊では恐らく許可がおりないだろうと唯なりに考えた末の『嘘』だったのに、よもやそれが裏目に出ると思わなかったのだ。だから、焦る。

しかし救いの神は意外な場所から舞い降りてきた。

『あ、もしかして、皆さんは別の場所でセッションしてる、とか？』
「——！ そ、そうなの。いまは私があずにゃんの傍でお世話をする時間で……………」

少し早口になりながら唯は弁明した。不恰好だが、いまは憂さえ

騙せればそれでよかった。

『ん、そっか』

憂はどこかサバサバした様子でそう答えると、しかし後は何も口にしなくなった。何とかやり過ごすことができふうっと胸を撫で下ろすも、しかし電波を通じてふたりの間を流れる空気は澱みきっており、これはこれで居心地の悪いものであった。

ゆえに、唯は戸惑ってしまう。憂と対して重い空気が漂うことなど、いまのいままで一度もなかったのだ。

「どうすればいいんだろ……」

ややあつて。意図せずに少女の口から漏れた言葉は、何に對してのものだったろうか。

恐らくは——妹と後輩、その両方について等しく悩んだのかもしれない。

後から思うならば、それは電話口で口走るべき科白ではなかったはずだ。

だが、彼女の妹は姉から何かを感じ得たのだろう。

『……素直になればいいんじゃないかな』

ぼつり。そう呟く。

「えっ……?」

『あつ、な、何でもないの……忘れて』

稀に見ぬ憂の慌てた素振りに、唯は茶化すでもなくただ「う、うん」と答えるに留まってしまった。首を傾げかけたが、何かを言う

ことはない。と言うより、何と言うべきか考えるいとまを与えてはもらえなかった。

『あ、あんまり長話しちゃうと梓ちゃん起しちゃうかも……じゃあお姉ちゃん、合宿、楽しんできてね』

返事をする前に、切られた電話。耳元から視界の中央部へと携帯電話を持ってきては、ツーツ、ツーツ、と虚しく終話音を鳴らす端末を暫くは不動のまま眺め続ける。

話し声が消えた別荘の中は、ひどく静かだった。

『……素直になればいいんじゃないかな』

胸中渦巻く憂の一言は静寂な別荘をも巻き込んで共鳴しているかのような錯覚を見せ、あたかも耳元で直接呟かれているが如く唯の脳内へと響き渡ってくる。忘れろと言われて、素直に「はいわかりました」とデリートキーを押せたなら或いは楽かもわからなかった。しかし今回に限ればそれも当てはまることはない。その言の葉は憂がどこか達観しているような印象を唯が受けたためか、事実として心の奥深くにまで浸透していったからだ。忘れろだなんて、とうでもない。むしろ彼女にとっては最も必要だった一言と言えただろう。

物思いに耽るも束の間の話。携帯を折りたたんでポケットにしまい、台拭きを持って立ち上がった唯はそのままキッチンへと足を伸ばした。流水でジャブジャブと布巾を洗い、絞ってどこか適当な場

所に広げて掛けた後、後ろ髪がわりと邪魔になっていることに気がつき丁度良く持っていたヘアゴムで妹の真似をし纏めて結ぶ。一、二回首を揺らし快適だと言うことを悟った唯は続いてがさごと家捜しを開始した。

紬からは、予め必要なものや食料は全て別荘に用意してあると説明されているし、それらを自由に使用することの許可もいただいている。万が一、破損等が生じても修理費用や弁償については気に病むことはないからとまで言われていた。とは言え借りている身だ、紬がどれだけ温厚で寛大な人柄であったとしても、それに甘えすぎるわけにはいかない。紬の事前通達は、あくまで保険として考えるべきではあった。だが所有者様のそれがあったからこそ、普段全く料理をしない唯であってもどこか安心しつつ炊事に打ち込める環境が整っていたのは言うまでもない。

「……ふう」

戸棚やシンク下、冷蔵庫などを一通り調べ終えた唯は、みずから探していた物を全て集めまずは一箇所にまとめてみた。台の上に置かれたのは土鍋と卵、青々としたほうれん草に、チンするだけで食べられるご飯。お米はないのかなとあちらこちらを回ってみた唯だったが、どうやら冷蔵庫に入れられたこのパック詰めのご飯以外は用意されていないようだった。手間なくご飯を食べれるようにとの紬の配慮かもしれない。

次に土鍋のふたを開けた唯は流し台でさっと中をゆすぐと、そこにレトルトのご飯を一杯分入れた。続いて浄水器を通した飲み水をご飯の分量の倍弱程土鍋の中に流し込んだら、適当なサイズに切ったほうれん草と溶いた生卵を何の躊躇いもなく加え、塩を振ってふたをしてそのまま電子化がなされたクッキングヒーターの上に置いて火力を上げた。

あとは、待つだけ。お粥と言う料理の手軽さに感激しつつ、唯は

土鍋を眺めながらでき上がったお粥を食べさせる少女について思考を巡らせる。

余計な感情、はたまた状況が唯の行く手を阻みはしたものの、つまるところ簡単な話だった。梓がどうであろうと、どう仕掛けてこようと、唯は唯のできることをやる他ないのだ。それは事の発端を回想するに至った際にも、膝を抱え塞ぎ込んだ際にも思ったこと。わかったようなつもりでいて、もしかしたら唯はそれをきちんと理解するまでには至っていなかったのかもしれない。

もしくは。揺れ動く感情にみずからを見失っていた、か。

理解こそすれ、されど本当に自分は梓を、たった一人の後輩を愛でており、飼うと称して束縛したかったのか。残念ながら先程までの唯では成長途中の胸を張って「うん」とは言えなかっただろう。そう言わしめるための自信が、欠落していた。

——どちらであっても、唯が自分に、自分の気持ちに対し素直になりきれていなかったのは確かである。

だから、もう迷うことはやめようと思ったのだ。自分に嘘はつかないと決めたのだ。

そうでなければ、全てが無駄になる。梓への気持ちも、部室での滞への宣戦布告も、紬の好意も、そして妹の一言も——嘘をついたはずの相手からまことを得るとは、何だか皮肉なことこの上なかった。それについての埋め合わせは、いずれやらねばならぬだろう。しかしいまはまず、目の前の一週間をとにかく一生懸命頑張るしかない。

とは言え、その実無計画のまま本戦へと突入してしまった唯だ。いまさっきの思い付きを実行したところで、梓の牙城を崩すには至らないだろう。人の心は戦とは違う。

だからこそ、唯は正攻法を選択した。つまりは献身的に梓に接することで、人心を掌握せんとしたのだ。唯がそこまで深く考えたか

どうかは別としても、体調を崩している梓からしてみれば何かしら
は感じるものがあるだろう。下手な奇策よりもずっと実効性がある。

料理に不慣れな唯がこうしてキッチンに立ったのは、それら一連
の思考が弾き出した答えに起因したためだ。勿論、邪な感情だけで
なく単純に梓に喜んでもらいたいと言う気持ちも存在していた。正
直なところ、お粥を作ろうと思いついたのはあくまできつかけに過
ぎず、彼女の行動理念の大半を占めていたのはむしろ純粋な想いの
方だった。あずにゃん、喜んでくれるかな――されど重なり合う淡
い期待の数々も、圧倒的な経験の無さが災いし脆くも崩れ去ってし
まった。

Turn. 5 f..「もう私、逃げたりしないから……素直になるから」

「うわっ！」

唐突に、鍋より噴出す泡。放置すればそのまま別荘中を飲み込んでしまうのではないかと錯覚させるほどの勢いを持ってとめどなく溢れ出す。

不測の事態にどうすれば良いのやら、見当もつかぬまま唯は鍋のふたを開けようと不用意に取っ手に右手を伸ばした。刹那、

「熱っ！」

ふたに触れた右人差し指に痛みが走る。咄嗟に耳たぶに触れて冷やしてみるも、ヒリヒリとした痛みが抜けることはない。その間にもぶくぶくと泡は出続け、これでは本当に別荘が大惨事になりかねないと危惧した唯は、無事な左手で先程洗って近くに掛けていた布巾を手に取りそれを間に介す形で漸く土鍋のふたを開けることに成功した。噴き出していた泡は立ち込める湯気とともに消えたが、グツグツと煮え続ける鍋は相も変わらずそのままだった。クッキングヒーターの電源を落としても保温性に優れる土鍋はまだ冷えゆく様相を呈さないが、口が開かれたことによって中身を確認することは可能になった。

「……………」

想像とは異なるものが、そこにはあった。比較対照となるイメージが料理名人のそれでは雲泥の差が生じるのも致し方無い話ではあるし、そもそも比べること事態が可哀想ではある。ただこれは自分が食べるのではなく人様に提供しようとして拵えたものだ。もし唯

が同じものをご飯として出されたら、素直に食べるかどうかを明言することはできない。

唯は、静かにその場から後退した。落胆したのは事実だが、かと言ってそれをまるごとゴミ箱へ入れるわけにもいかない。それに見てくれはああでも、味が悪くなければ及第点の評価くらいはつけられる。つけるのは梓ではなく自分自身であるが、毎日美味しいものを食べているため舌は肥えていると自負はしているのだ。ただあの鍋の様子では今度は口内ないし舌の火傷を引き起こしかねないと思い、少し冷めるまで一旦リビングにて火傷した指に簡易手当てを施そう、そう思ったのだ。

救急箱の場所は把握済みである。先程、キッチンでの大搜索の際、唯はこの度必要な白いケースが戸棚に収まっていたのを見つけていた。それを手にすると彼女の両足は一路リビング目指す。たかだか、十数歩の旅だった。

もう既に何かと印象深くなったリビングの、自身が綺麗に拭き掃除を行って間もないテーブルの上に箱を置き、中身を調べる。必要なのは軟膏と、後は絆創膏だろうか。目当てのものを見つけた唯はそれを取り出し、処置に移る。

と言っても何難しいことをするのでもなく、言ってしまうえばお粥を作るよりも造作のない単純作業だ。時間などかかってものもの二分程度の話であり、終わってしまえばすぐさま彼女を憂鬱感が苛んだ。やる気が沸いていた分だけ、反動も或いは大きいものだったかもしれない。

足取り重くキッチンに引き返す。救急箱を元あった場所に返し、今度は食器棚よりスプーンを取り出した。それを利き手でぎゅっと握り締めたままでき上がった鍋の前まで歩を進めれば、お粥はまだ湯気を立てていたが時間が経過した分だけ多少なり冷めてはいるようだ。

それを、スプーンでひと掬い。立ち上る蒸気をふうふうしつつ、意を決して匙を口腔内に押し込めた。

「……………んっ？」

一口だけでは判断がつかず、同じ工程を踏んでもうひと掬いを口に含み、舌の上で転がす。

「……………あれ、ふつうだ」

予想していたよりも味自体に問題は無く、唯の胃袋に若干の隙間があることを差し引いてもそのお粥は普通と言えた。若干煮えすぎた感のあるほうれん草の触感と卵の舌触りに難ありだが、食べられないレベルではなかった。でもどうせなら作り直したいな……そう思いつつも、土鍋の周辺を見やればそこは大惨事こそ免れたものの惨状と表すには十二分だった。こっちもお手入れしてからじゃないと、と思うと、なんだか億劫だ。致し方ないが、唯は妥協することに決めた。

碗にお粥を盛って、スプーンと共にリビングへと運ぶ。これくらいのイタズラなら許されるよね、とスプーンは先程唯が使ったものをそのまま持ってきた。顔を少々綻ばせつつ、唯は梓が来るのを待つ。それとも、迎えに行った方が早いだろうか。

彼女が起きていると言う確証は無いものの、しかしこうなってしまっただけは矢も盾も貯まらないのが唯の短所であり、場合によっては長所でもあった。腰を上げると唯は梓が眠っているはずの部屋に向けて進路を定めた。

歩いて移動するのに大した時間はかからなかった。むしろ精神的に追い込まれ走っていたさっきの方が時間を有したかのような錯覚に陥る。不思議だな、と唯は思う。数十分前には一時でも恐怖の対象として見ていた梓をいまはこちらから迎えに行っているのだから、どこか違和感を覚えるのも仕方のない話だろう。

「ごめんねあずにゃん……ほんとにごめん」

部屋の前。扉を介し、向こうにいるはずの梓の顔を思い浮かべ、唯は呟いた。

口にしたそれは――謝罪であり、彼女の決意だった。

「もう私、逃げたりしないから……素直になるから」

そして「ふううつ」と息をつき、

『トントン』

目の前の木の板を鳴らす。控えめに叩いたつもりが、意外と高い音を響かせ別荘内へと吸い込まれた。もしこれで起してしまったら申し訳ないな、と唯は思ったが、中から聞こえてきた「どうぞ」のそれが寝起き直後の声ではないと知り胸を撫で下ろした。

『ガチャ』

扉を開ける。案の定、そこには梓がおり起き上がってこちらに視線を注いでいた。

血色は良く、心配ないと言っても言うかのように淡く笑っている梓。しかしその顔が、瞬時に凍りついた。顔は次第に青ざめ、身体は小刻みに震えだす。突然のことに唯は内心戸惑うも、やはり無理がたかったカラダに運動を課するのは良くないかもと考え、じゃあ作ったお粥をこっちに持ってくればいいのか、などと悩んでいた。しかし梓のそれは、唯すら気づかない別のことに由来したようだ。

「憂……!?!」

かすれた声が紡ぎ出すは、みずからの呼称ではなかった。予期せぬ名前が出てきたことに唯は驚き半分、怪訝半分で梓を見た。もしかしてさっきの電話を聞かれてたのだろうかとも思ったが、それにはすぐさま心の中でかぶりを振った。だからと言って怯えられる言われはないし、第一、電話中に唯は憂の名前を一度も口にしていなのだし。

「どうしてここに……どうして」

さりとてそれも、解決するに容易い謎だった。

「どうして、って、あずにゃん、もしかして寝ぼけてる?」

唯が首をかしげつつ一言声をかければ、梓は目を二、三度瞬いて唯の姿を凝視した。

「……あ」

梓も気がついたようだ。

「あ、もしかして髪型で勘違いしたのかな? お料理に邪魔だったから、くくっておいたんだ」

そう言えばそのままだっけ、と思いながら唯は後ろ髪を括ったため形作られた小さめのポニーテールを触りつつ答える。ヘアゴムを取れば、髪の毛に若干の癖は残ったもののいつもの平沢唯の完成だ。

「お料理と呼べるほどのものは作ってないんだけどね」

蛇足ではあったが先程での自分を顧みて、唯は思わず苦笑してしまふ。その苦笑いにこそ梓は乗ってこなかったものの、彼女を縛り付けていた緊張の糸は明らかに緩んでいた。表情はドアを開けた直後の穏やかだった頃のものに帰り、呼吸も落ち着いている。

憂に対し何か後ろめたいものがあるのだろうか。気になったが、唯は訊ねなかった。自分にも似たような感情があったためだ。……どうあれ、この様子なら部屋から連れ出すのも問題なさそうである。

「さ、あずにゃん。こっちのテーブルに来て」

はい、と頷いた梓を唯が連れ行く格好で、ふたりはまたリビングにて相對することとなった。予め盛っておいたお粥の前に梓を座らせる。碗の中のお粥はまだ仄かに湯氣を立てており、食べごろの温度だとふたりに知らしめるいい指標となっていた。

お碗とその中身を見た梓が何か反応を見せることはなかった。不評を買うよりは何倍もましだが、これはこれでなんだか寂しいな……唯がそう考えていると、梓はお粥ではない別のところで何かを思ったようだ。

「あの、その指は」

梓の視線が、右の人差し指に集中している。ああ、と思い唯もまた絆創膏が巻かれた人差し指を見やった。

「慣れないこと、するもんじゃないね。火傷しちゃった。えへへ」

照れ笑いで誤魔化すが、その実恥ずかしくて仕方がない。

対して梓は何かを言う。誤魔化すことに気を取られ過ぎていた唯は彼女が何を言ったのかをきちんと聞き取れなかった。

「何か言った？」

「いえ、何でもありません」

答える気がないのなら無理に詮索するのはやめよう。気にはなるものの、それよりも折角作ったお粥を梓に食べてもらわねば。唯はスプーンを手にすると一緒に碗を持ち、中身を掬って梓の口の前に差し出した。

「じゃ、あーん」

「は？」

梓の目が大きく見開かれた。それは真夏の炎天下で唯が梓に「飼われてみないか」と訊ねた瞬間を彷彿とさせる表情だった。構わず、唯は続ける。

「ほら、あずにゃん。あーん」

「じ、自分で食べれますよ」

梓は拒むが、この程度で折れる唯ではない。

「いいからいいから。あーん」

「もう、いいですってば唯先輩」

しかしなかなか首を縦に振らぬ後輩に、唯は自然と唇を尖らせていた。――間接キスよりも、直にの方が望みだとも言うのか。

「私がそうしたいんだからいいの。なんなら、口移しがいい？」

されどこの一言には頑なだった梓も「むう」と顔をしかめ、その数秒後には渋々と言った様子で、

「わかりました」

と呟いた。どちらとも取れる返答だが、過激な方を選択すればいいつぞやのようにビンタされかねない。唯は静かに、手持ちのスプーンを前方へと動かした。

銀食器が梓の小さな口の中に入り……閉口。そこに彼女の舌が纏わりつき、掬われた流動物と予め付着させておいた自分の唾液とを根こそぎ奪い取っては、最後に上下の唇で捕捉、スプーン上のすべてをみずからの内に取り込まんとす。暗闇の中から出てきた匙は唯の物ではない粘液を纏い、薄暗いリビングにて異様な輝きを放っていた。

未だ感じたことのない快感を唯は覚えた。胸の、心の底からゾクゾクとするような、不思議な感覚だった。軽音のそれとは大いに異なる高揚感に、唯はどうすればこの感覚をもっともっと感じていられるだろうか考える。直にキスするのは難しいだろうし、ならば……。

「……ところでさ、あずにゃん」

——ひとつだけ、思い当たるものがあった。それはゲーム開始直後に梓が定めた、罰ゲーム。梓は先程——唯の姿を見て憂の名前を呼んでいた。

「この場にいるふたり以外の名前を出したら罰ゲーム、だったよね」

本人とて忘れてはいなかったのだろう。その証に梓は『ピクリ』と身体を震わせ、恐らくは無意識だろうが上唇を舌の先で舐めてみせる。そんな少女の仕草が妙に艶っぽく、唯の心は再びの快感に支配されるのだった。

Turn. 5 g.:「りっちゃんは、どちらだと嬉しい？」

「ごめんなさい。無いの」

紬の声は、妙に凜としていた。

「な、んだと……？」

強張った漑の顔。その声も同様に険しい。半ば現実を拒否するかのような漑の姿に、さりとて律は何を言うことをせず黙っていた。紬のそれが、予想できなかったかと言えばそうではないからだ。

「前にも言ったと思うけど」

漑に対する紬は、謝罪の言葉を述べた先程とは打って変わって悪びれる素振りなど微塵も無くこう言っている。

「うちは常に何かしらの予定が詰まっていて、それは今日だって例外ではないわ。ほんとはふたりのためのお部屋も用意したかったのだけど、でもそれを数日前に言ったのではいくら私のお願いと言っても通らないの」

我俣で済むレベルと済まないレベルがあるのよ、紬はそう付け加えた。確かに個人レベルで予定していた買い物キャンセルするのと家規模での予定を取りやめるのでは訳が違う。違いすぎる。

ふたりとて、その言い分が理解できないわけではなかった。

それでも漑は、納得いかなそうにジト目を送る。

楽しいお茶会のはずが、室内にはまた異質な空気が漂い始めた。

「てか、じゃあどこで寝ろって言うんだよ？」

居た堪れなくなり律は口を開いた。無言を嫌ったのもそうだが、何より滯の表情が全く冴えてないのが気になったのだ。

「仮眠をとるくらいならソファで充分だろうけど、滯みたく体調の優れない奴にそれは酷な話だろ」

「……それもそうね」

紬は少しだけ考える素振りを見せ——實際きちんと考えているのかどうかは定かではないが——次の瞬間には胸の前で『パン』と手を打っては、

「じゃあいまから、少し眠たい時や気分の悪い時はここの隣の部屋を使って。無理強いは良くないものね」

「——は？」

あまりに急な方向転換っぷりに、律は思わず間抜けな声を漏らした。方向転換と言うか、思いつきり真逆である。

「うん、どうかしたの？」

紬は何事もなかったかのような自然体で滯を見た。どうやら紬のそれに間を抜かれた気分になったのは律だけではなかったらしく、体調不良を訴えていた少女もまたきょとした顔で鍵盤少女を眺めていた。

「私としては多少の無理なら押して欲しいと言うのが本心ではあるけど、でも悪化でもしたら大変になるのは私じゃなくみおちゃんだもんね。だから、遠慮しないでいいのよ？」

我俣云々と垂れていたお嬢様は、さていずこへと向かわれてしまったのだろうか。しかし漑は紬のそんな態度を怪訝に思うよりも、仮眠室使用の許可が得られたことを一番に喜んだと見え、

「あ、ああ……ありがとうな」

不器用な表情で紬に対し礼を述べていた。律は、少しだけおもしろくなかった。

「お大事にね」

淡く笑う紬とぶすつとしたどこか不機嫌そうな律に見送られながら漑は部屋を後にした。

パタン、と扉が閉められると、紬は律の傍までやってきては括れのあるカラダを律のそれに密着させる形でモニターに向き合った。

「な、なんだよ……」

「何だと思う？」

秋の空よりも忙しない紬の態度に律は戸惑いながらも次第に疲れを感じるようになっていた。それゆえの反応の薄さに、紬は物足りないとも思っただろうか。

「嫉妬してるりっちゃんが可愛いと思ったのかもしれないし、もしかしたらひとりの女の子としてりっちゃんが好きなのかもしれないわ」

「っ———！」

律は息を飲んだ。心は、なぜか苦しかった。

「りっちゃんは、どちらだと嬉しい？」

「どっ、どっちでも嬉しいわけないだろ——！」

「そう、それは残念」

律のノーに、しかし紬はあっけらかんとしていた。既定通りの答えが返ってきて何の感情もわいていないようにも受け取れる。気がつけば、カチューシャの少女の口からは短く息が漏れていた。

「……なあ、ムギ」

力なく紬を呼ぶ。紬は首だけを律の方へ向けた。

「一体、何がしたいんだよ。あたしにはムギが何考えてるか全然わかんないよ。梓と唯に別荘を貸したことも、あたし達をここに呼んだことも、何もかもわかんないよ。部屋だって、実は他にも空きがあるんだろ。それにさっきムギが部屋に帰ってきた時に後ろにいた娘だって——」

「言ったでしょ」

紬は律の言葉を遮った。そして首を再びモニターの方へ戻し、口を開く。

「私はどちらの味方にもなりえて、でもどちらの味方でもないんだって。だから私は頼まれたお願いが私にどうにかできることだった

らそれを叶えてあげるし、片一方に不公平が生じないように手を差し伸べるわ。でもりっちゃん、勘違いしないで欲しいのはいま私のお家になりっちゃんが、そしてみおちゃんがいるのは、ふたりが決めたことに他ならないということ。りっちゃんも、それは重々わかってるでしょ？」

わかってるけどさ……小声でそう答えるのが、いまの律の精一杯だった。

紬と別れたあの後——家に帰り、晩になり、自分の部屋で携帯を手にし、どうすべきか律は悩んだのだ。それでも律は滞に電話をかけ、事のあらましを聞かせ、誘ったのだ。滞だって、了承したのだ。

いまとなつては、あの時の自分の判断が本当に理解できない。

「ついでに言っておくけど。空き部屋の読みはその通りよ。ふたりとは夜通しでモニターを眺めてるつもりだったから。事が夜に展開しないとも限らないものね」

妙に熱っぽいのは紬のデフォだろう。深くは考えないが、それでも一週間の不眠不休で目の前のモニターを眺めることになる予定だったのかと思うと、律の背筋は自然と凍った。

「それと。さっき後ろにいた娘のこともりっちゃんが考えた通りだと思うわ。……あの娘にも知る権利はあるのだし、のけ者にするのは私のポリシーが許さな——」

不意に、紬の言葉が途切れた。理由は言わずもがな、モニターの存在した。

映し出していたのはバスルームから出たばかりの——ばかりと言っても少し時間が経過してはいるが——梓の姿だった。片手には携

帯を持ち、誰かと通話しているようだ。

先程の唯の姿を律は思い出す。ならばそれを食い入るように見つめる紬の姿は、さっきまで隣にいた漑と言うことになるだろうか。通話は数分……三分くらいで済んだ。すると紬は勢い良く立ち上がり、

「行こう、りっちゃん」

と律の手を取り歩き出す。

「ちょ、どこにだよ？」

「みおちゃんのところ」

端的にそう答えた紬の顔は、怒気と愉悦が混同したなんとも不思議な表情で彩られていた。

Turn. 5 h. 「おしおきよ、みおちゃん？」

指定された部屋の扉を開けた漣の顔は、色濃い疲労感に支配されていた。

いくつもの言葉が、感情が、情景が、彼女の脳裏に浮かんでは消える。その全てが、四弦少女にとっては都合の悪いものだったが、しかし彼女にはどうすることもできない。言葉を消去することも、感情に素直になることも、情景を黒く塗りつぶすことも。

ふらふらとした足取りで漣はベッドの傍まで歩いていき、そこに勢い良く倒れこんだ。ふかふかのベッド。沈んでいく漣の全身を、果ては心まで暖かく、そして優しく包んでくれるような錯覚を覚え、漣ははらりと滴を零した。まさか寝具に泣かされる日がこようとは夢にも思わなかったが、それでも事実、このベッドがいまこの屋敷にいる誰よりも、何よりも漣に、漣の心に安らぎをくれる。彼女はそう思った。

『なあ律……私のこと、どう思ってる？』

「——うっさい、ばか」

回想されたお手洗いで空振りに、漣は悪態をついた。単に間が悪かったのか、それとも律には答える気がなかったのか、真実がどちらかわからなくなり、漣はそれを怖いと思った。

「ばかりっ」

彼女は本当に自分を好いてくれているのか。ならばなぜ、自分はこんなにも苦しいのか。無二の親友をどこか信じられなくなり、漣はまた瞳に涙を湛えた。

『実はさ……こないだの、部室でのことなんだけど』

しかし、いやだからこそなのかもしれないが、漣の記憶に残された律の声がカラダの内側で響く。まるで彼女が、耳元にいるかのようだ。

『――それで、ムギに誘われたんだ。うちに来ないかって。漣は……どうする?』

なぜあの時、彼女はイエスと返答したのか。紬の誘いを断ることだってできたはずなのに、なぜ自分は、ここにいたのか。律同様、漣もまた果てのない自問自答の渦に巻き込まれていった。

そこから逃げたくなつて、漣は目を閉じてみる。流れ出した涙を拭おうと、左の腕を臉に当てた。ひんやりとした腕が熱くなった目頭の熱を奪っていく。ふたつの水門だけでは防ぎ切れない水をせき止めるに加え、それはとても心地よい重量感だった。

このまま眠って、全てが悪い夢だったなんてオチなら、どれだけ幸せで、救われることだろうか。だが漣は心の中でかぶりを振る。これは現実であり、起きていることは全て事実だ。そんなの、わかっている。それはわかっているからこそその悩みとも言えたかもしれない。

彼女にはもう、自分に関わる全てをいままでのような目で見続ける自信がなかった。紬も律も、唯も、それに――

『梓の方から、逆に唯に言い寄ったらしくてさ。先輩が私に飼われてみませんか、って』

「あずさ……」

言葉が漏れる。唯一の後輩もまた、次に会う時には違う姿で漣に

は映るのやもしれない。それは、なんだか寂しくて、辛いことだと彼女は思った。

——ならまだ幾許かの良心が残るうちに、可愛い可愛い仔猫のよな後輩をただ純粹に可愛いと思っていられるうちに、梓の声でも聞いてみれば良いだろうか。バスルームからは出ているのだし、繋がる確率が高いはずだ。

腕をどかし目を開き、ポケットから携帯電話を取り出してアドレス帳を表示させる。中野梓の項目から電話番号を選ぶと、決定キーを押すだけで通話可能な状態にはなった。

しかし、後一步が踏み出せない。

それが容易に踏み出せる一步なら、濡は紬の屋敷に来る前に梓と連絡を取っていただろう。真実を聞き、安堵するなり問い質すなりしていただろう。

つまるところ、怖いのだ。自分の知っている世界ではないものが見えてしまうのが、果てしなく怖い。それでは進めない、何も始まらないと心では理解していても、怖いものは、怖い。

『これが。私の、本当の気持ちだもん』

自分に素直になれる唯が羨ましく、いまだけはとてまかつこよく見えた。ああやってみんなの前で堂々と宣言してみせる様も、逆に清々しく感じられる部分ではある。普段はどこか間の抜けた風で、天然でドジばっかりの、唯なのに——

「——あっ……！」

手に力が入ったせいかな、思わずボタンを押してしまった。よって通話は開始されてしまい、プルルル、プルルル——と無機質な呼び出し音が目の前の携帯電話から響いてきた。それを止めることもできずにただただ濡は固まっていたが、四コールから五コールにかか

る間でその音も鳴り止み、

『――もしもし』

代わりに滯の耳に届いてきたのは愛い後輩の美声だ。

『もしもし……滯先輩？』

「あ。……もしもし、梓」

『どうしたんですか？』

電話に出られてまでそれを切るわけにはいかず、気後れしながらも滯は携帯を耳元に寄せた。落ち着いた様子の梓の声は彼女がうろたえるに充分で「あ、えっと……」と戸惑いながらも何を話そうかを考える。かける前に予め準備ができていればよかったがそんな余裕などなかったし、それはいまだって同じことである。

『?..?』

クエスチョンマークを具現化したような声が耳元に届く。相手が相当訝しんでいると感じた滯は、とりあえず何か言わないと言う焦燥感に駆られ口を開いた。

だがこう言う時は、往々にして意図しない科白が出たりするものである。

「あ、梓の声が聞きたくなって……」

『えっ?』

「いやっ、なんでもない！　と言うか、いま何かしてた感じ？」

『いまですか？　……ちょっと汗を掻いてしまったのでシャワーを浴びて、あがった直後ですけど』

「そ、そっかシャワーか……はは、わ、私も浴びたいかなー、なん

て……」

我ながら何てことを言っているのか。電話の最中でもなければみずからを叱責していたかもしれない。対して梓は、声の主に対して余計に怪訝さを覚えたようだ。

『滯先輩、どうしたんですか？ 何かちょっと、変ですよ』

「へ、変？」

『え、ええ……』

律なんかが隣にいれば「何テンパってんだよ」などと確実にダメだしされていたことだろう。一連の掛け合いを終えひとたび冷静になってみれば、滯の顔には羞恥と落胆の色しか浮かんではいなかった。

「ご、ごめん……」

『いえ。気にはしないので大丈夫ですけど……』

その言葉に人知れず胸を撫で下ろした、恥ずかしがりな女の子。それでも、少々の落ち着きを手にした滯は会話を続けようと、続けなければならないと半ば無理遣りに言葉を紡ぐ。

「でも、いま梓が何をしているのか気になってたのは事実だから――ほ、ほら、最後の部活の日から会ってなかったし」

『っ―――！』

梓が、息を飲んだ。琴線に触れてしまっただろうか、と滯が心中おどおどしていると、

『……聞きましたか、唯先輩か紬先輩に』

一切の感情を押し殺したような梓の声が、スピーカーから漏れた。
——飼猫の話だな。漑は直感的に思った。話自体は既に漑の耳にも届いてはいる。だからこそいまこうして琴吹邸から梓に電話をかけているわけだが、さりとてそれを知ったのは律からの電話で。だからノーと答えようが、漑は嘘をつくことにはならなかった。若干屁理屈だが、いまここでイエスと答えることが漑にとって有益に働くかと言えば、微妙な話のように感じたのは事実だ。

「何の話だ？」

努めて冷静に漑はノーと答えた。

『——いえ、何でもありません。忘れてください』

梓は何を語ろうとはしなかった。

それが、漑には少し物足りなく感じたのは事実であり。

「もし、何か抱えてるんだったら、遠慮しないで言ってくれよ？
ひとりで抱え込むことなんかないんだからな」

言い終えると、梓に悟られぬよう漑は自嘲気味に笑った。ついさつきまで、いやいまでもだが、ひとり悩みを抱え込んでしまっている人間が、何偉そうなことを言ってるんだか。こんな時にまで先輩風を吹かせる自分が、少し、おかしかった。

『——ありがとうございます、漣先輩。いまは特にその必要もありませんから、お気持ちだけ貰っておきますね』
「そ、っか」

彼女のこの対応に、梓は強いな、と漣は思う。彼女が倒れる姿を見てしまっているがゆえにそう思えるのかもしれないが、それでも、自分とは大違いだ。

電話の始めこそあだったのが、次第に心が落ち着いてきていることを漣は知った。緊張していたころの自分はどこを吹く風、もう少し、梓と話がしたい。そう思って口を開く。しかし、

『……ねえあずにゃーん——』

遠くの方から、しかし反響した人の声が聞こえてきた。
言うまでもなく、唯の声だ。

『あっ……』

梓は一瞬うろたえるも、すぐに、

『す、すみません、ちょっと呼ばれてしまって……じゃあ漣先輩、途中で申し訳ないんですが失礼します！』

漣が「あ、ああ」と答える頃には、携帯は既に終話音を鳴らし始めた後だった。

これが、先手を取った人間と後手に回った人間との絶対的な差な

のだろうか。

モニター越しに見ていたものとはまた違った現実を最後にまざまざと見せ付けられる形になり、漣の気分は降下の一途を辿った。これでは、何をしたくて梓に電話をかけたのかわからない。

漣は再びベッドに身を埋めた。もう寝よう、いま位は寝て全てから逃げてしまおう。

だが素直に眠ることを、漣の身体自身が許してはくれなかった。

「うつ……」

特に気持ちが悪いなどではなく、下腹部に強大な違和感があるのだ。それは言わずもがな隣室で開かれたお茶会のせいであるし、言いかえれば、何を考えても何杯も何杯も紅茶をおかわりした自分自身の責任でもあった。睡眠をとるのは、トイレに行ってからだな。

どこか気だるい身体を起こし、漣は部屋を出ようと歩き出す。するとそれを悟ったのだろうか、廊下へと通じる扉が独りでに開いてみせた。自動ドアでもない扉が独りでに開くなど、他者の介入でもなければ起こりうるはずがない。

ぽかんとした顔のまま、漣は部屋の中に入り込んできた人物を見やった。

紬と、手を引かれた律だった。

「みおちゃん」

無表情の律に対して、紬の声は幾分陰しく聞こえる。

「携帯、貸して？」

すると伸ばす右手と共に、漣に携帯を差し出すよう求めてきた。

「な、なんでだよ？」

「みおちゃんに疑念を抱いたからよ。それが晴れば携帯は返すし、きちんと謝罪もするわ」

何のことかわからぬまま、しかし紬の剣幕に圧されてしまった漣は素直に携帯を取り出して紬に渡した。それを受け取ると、彼女は慣れた手つきで操作していく。だがそれも十秒とかからないうちの話で、指を止めるや、特徴的な眉をピクリと動かしてみせた。

「ねえ、みおちゃん」

私、言ったよね——そう言いながら紬は携帯の画面をこちら側に向けた。

発信履歴。

一番上には、言わずもがな梓の名前が踊っている。

「部外者がどうこう指図するのはよくない、って」

「ち、違う！ 私ほただ……」

「違う、って、それを誰が証明してくれるの？ また梓ちゃんにでも電話をかけるつもり？」

「……………」

漣は、答えることができない。

「聞かれたら困る話でもしたのかしら。——まあ関係ないわね。みおちゃんが梓ちゃんと連絡を取ってしまったのは事実だから」

言いつけを破ったんだもの、その罪は償ってもらわなきゃ。そう言い、紬はにっこりと笑った。

「おしおきよ、みおちゃん？」

その間、律は一度も滯と視線を合わせようとはしなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6559m/>

けいおん！ 飼い猫とふたりの夏

2011年11月15日14時51分発行